

から たに ざか どう  
**唐 谷 坂 道**

(江戸時代末～明治時代頃の石畳道)

浜田川総合開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008年 8月

島根県 浜田河川総合開発事務所

島根県 浜田市教育委員会



調査前



石疊検出状況（1～2区）



石畠（3区下）



石畠終点と階段状刻目（4区）



刻目と横木（5区）



石疊下の小石面（3区上）



出土遺物（番号のないものは実測図非掲載）



唐谷坂石畳（本報告石畳より上側・未調査）

## 序

浜田市教育委員会では浜田川総合開発事業に伴い、平成19年度に浜田市河内町の唐谷坂道の発掘調査を実施しました。

唐谷坂道は、参勤交代道である浜田広島街道（浜田一佐野一今福一丸原一重富一市木一三坂峠一広島）の脇道にあたる浜田波佐道（浜田一河内・唐谷坂道一大杉峠一水上谷一七条一波佐一傍示峠一広島）の一部にあたります。この道は金城から浜田へ行く道として、近年まで頻繁に利用されていました。

発掘調査の結果、埋没していた石畳道が確認されました。山陰道や参勤交代道などの主要街道ではありませんが、石をきれいに配置してしっかりした石畳道を造っています。普段通行する地元の人々によって、長期にわたり維持・改修された生活道であり、昔からの道が廃れたり工事などで景観が変わってしまう中で、地域の道の具体的な様相を示す貴重な資料となりました。

本書はこれらの調査結果と浜田市の遺跡を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習など広く活用するための基礎資料としてまとめたものです。この資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた島根県教育委員会及び関係諸機関に深く感謝申し上げます。また、あらゆる面から調査にご協力いただきました地元の方々と浜田河川総合開発事務所に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成20年 8月

浜田市教育委員会

教育長 山田洋夫

## 例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が、浜田川総合開発事業に伴い実施した唐谷坂道の発掘調査報告書である。平成19年度に現地調査、平成20年度に遺物整理と報告書作成を実施した。
2. 調査は以下の組織で行った。

|      |  |
|------|--|
| 調査主体 | 浜田市教育委員会教育長 山田洋夫   |
| 調査指導 | 中越利夫（庄原市帝釈峠博物展示施設「時悠館」館長）  |
|      | 桑田龍三（浜田市文化財審議会委員）  |
|      | 島根県教育委員会 文化財課  |
| 調査員  | 柳原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）                                     |
| 事務局  | 浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係<br>文化振興課長 山根 稔・文化財係長 原 裕司<br>主任主事 灑山恵子・主事 宮脇 聖 |
3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

|      |  |
|------|--|
| 調査協力 | 中井将胤、古谷智英昭、森岡弘典                                      |
| 調査参加 | 岩本秀雄、佐々木五郎、佐々木定実、坪倉ひとみ、中田貴子、中田洋子、半場利定、平野夕子、吉賀久雄、吉田安男 |
4. 遺跡の測量は、設置した基準点を用いて石壙と石垣のレーザー計測を実施した。挿図の方位は磁北を使用している。業務は株式会社ワールドが実施した。
5. 附属CDには本文（pdf形式）、調査・遺物写真（jpeg形式）、レーザー計測による画像（tif形式・zip形式圧縮）、ショミレーションデータの動画（avi形式・zip形式圧縮）を収録している。レーザー計測による画像と動画は株式会社ワールドが作成した。
6. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。
7. 本書の執筆編集は柳原が行った。

## 本　文　目　次

|     |            |    |
|-----|------------|----|
| 第1章 | 調査に至る経緯と経過 | 1  |
| 第2章 | 遺跡の位置と概要   | 1  |
|     | 第1節 歴史的環境  | 1  |
|     | 第2節 遺跡の概要  | 4  |
| 第3章 | 調査の方法と成果   | 6  |
|     | 第1節 調査の方法  | 6  |
|     | 第2節 調査区の概要 | 6  |
|     | 第3節 遺物     | 39 |
| 第4章 | 総括         | 40 |

## 第1章 調査に至る経緯と経過

浜田河川総合開発事務所より河内町での第二浜田ダム及び関連道路の工事計画が提示され、市教育委員会に平成5年10月7日付で分布調査依頼書が提出された。その後、計画の具体化に伴い平成7年・11年・18年と断続的に協議と分布調査を実施した。

分布調査の結果、事業対象地内の平野部を中心に遺跡の有無を確認するための調査が必要と判断され、平野部を中心に下記の試掘調査を実施している。

いずれの調査地点でも重機と人力による掘削を行なったが遺構・遺物は確認されなかった（第2図）。

平成12年8月8日 3地点

（工事用道路・下流工区）

平成14年2月15日 3地点

（工事用道路・上流工区 その4工事）

平成15年11月19日 2地点

（工事用道路カネヤバラ線 その1工事）

平成19年度より事業対象地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である唐谷坂道の本発掘調査を実施することになった。平成19年1月10日に発掘調査依頼を受け、5月31日に発掘調査業務委託契約書を締結した。6月4日に調査を開始し、8月5日には現地説明会を開催し、約60名の参加があった。

なお、当初計画より保存状況のよい石疊道が検出され、範囲を広げた調査が必要となった。このため変更契約書を9月25日に締結し、追加調査を10月3日から11月2日まで断続的に実施した。平成20年度は遺物整理と調査報告書作成を実施した。

調査番地は島根県浜田市河内町1846番地1他2筆で、道は市道石見南8号線になっている。

調査区面積は以下のとおりである。

石疊道 長さ148.4m×幅2.55m=378.42m<sup>2</sup>

石垣1 平面(幅2m×長さ6m)+立面(長さ6m×高さ1.8m)=22.8m<sup>2</sup>

石垣2 平面(幅2m×長さ14m)+立面(長さ14m×高さ2.3m)=60.6m<sup>2</sup>

周辺調査 長さ2m×幅1m×21地点=42m<sup>2</sup>

合計 503.42m<sup>2</sup>

## 調査日程

平成19年度

|              |                      |
|--------------|----------------------|
| 6月4日         | 発掘調査開始               |
| 7月18日        | 中越先生・島根県教育委員会の現地調査指導 |
| 8月2日         | 現地において調査結果の記者発表      |
| 8月5日         | 発掘調査現地説明会（約60名参加）    |
| 10月3日        | 調査再開                 |
| 10月29日       | 桑田先生の現地調査指導（石材鑑定）    |
| 11月2日        | 現地調査終了               |
| 11月5日～11月30日 | 概要報告作成               |

平成20年度

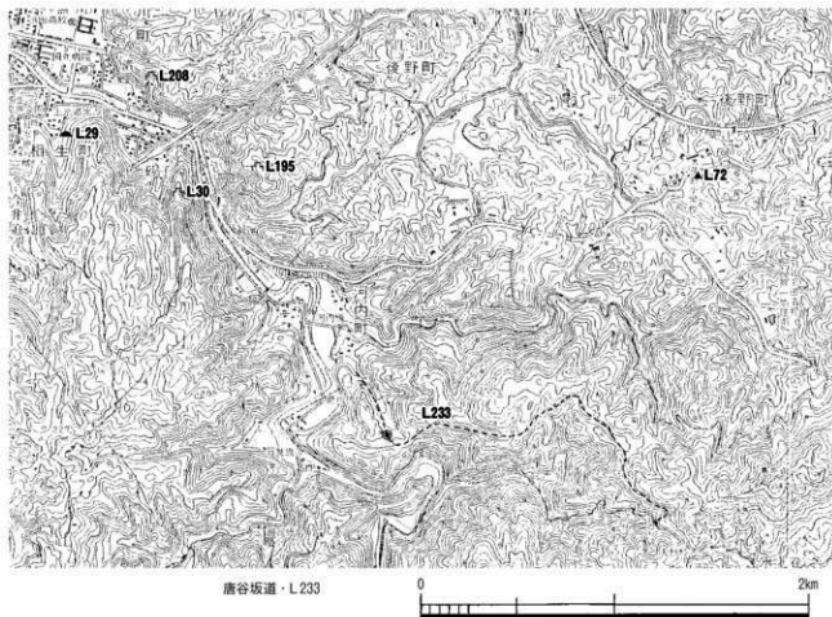
4月30日～8月29日 遺物整理・調査報告書作成

## 第2章 遺跡の位置と概要

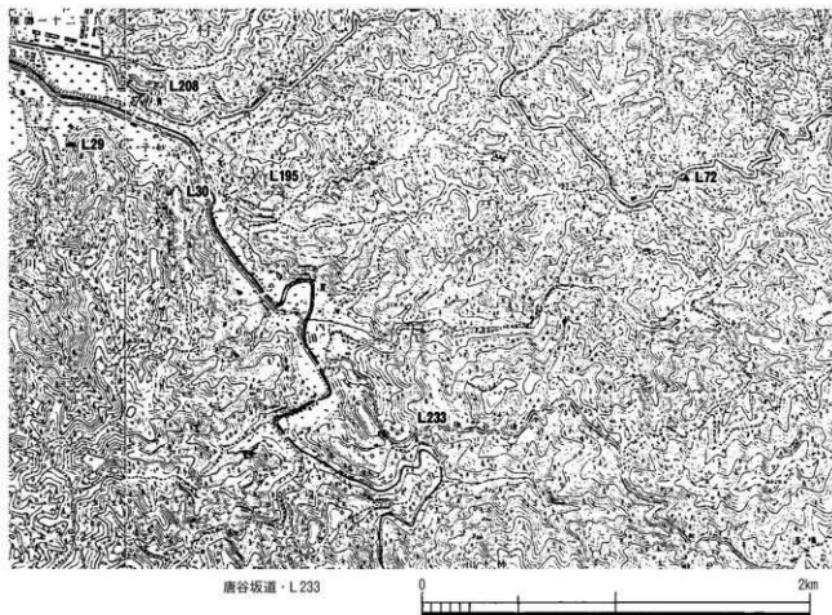
### 第1節 歴史的環境（第1図・第1表）

周辺に绳文・弥生時代の遺跡は確認されていない。古墳は浜田側で社家地古墳群（相生町）が確認されている。1.7×2mの範囲に横穴式石室の基礎石らしき石がある。現在確認できるのはこの石室1基のみだが、周辺から須恵器が出土したらしく、古墳群となっている。須恵器（杯・甕・壺・高杯など）は社家地八幡宮に保管されている（浜田市役所1950・川原1970）。

古代から中世にかけては那賀郡小石見郷と記されている。また、中世後期に現在の浜田は既に港湾都市として発展していたと考えられている（井上2001）。現在の浜田市街地の南東側（相生町周辺）は中世の山城として瀬戸内海・三子山城跡・正蓮寺山城跡があり、金城方面からの交通の要所（三宮口）である。瀬戸内海・正蓮寺山城跡では郭・三子山城跡には郭・掘切・堅堀が確認されている（浜田高校歴史部1983・平凡社1995・島根県教育委員会1997）。三子山城の麓には式内社・石見国三宮である大祭天石門彦神社（三宮神社）がある。この神社の神主で土豪である岡本氏（松村1988）の屋敷跡は現在国道186号線の法面下になってしまっており、川側の平成12年度試掘調査地点周辺の平地には「土居原」の地名が残る（第2図）。平地の東隅には移転した岡本家の墓地跡があり、近年の墓に混じって宝篋印塔6基以上、五輪塔4基以上がある。「大中臣正



平成11年発行・番号は第1表に対応(S=1/25,000)



第1図 遺跡周辺図 明治34年発行・番号は第1表に対応(S=1/25,000)

| 島根県<br>遺跡番号 | 遺跡名    | 所 在    | 種 別         | 概 要                 |
|-------------|--------|--------|-------------|---------------------|
| L 233       | 唐谷坂道   | 河 内    | その他<br>(街道) | 石疊道、近世後期～近代頃、発掘調査実施 |
| L 29        | 社家地古墳群 | 相生 社家地 | 古 墳         | 横穴式石室、須恵器           |
| L 30        | 三子山城跡  | 相 生    | 城 跡         | 山城、三ツ子山城跡、郭、掘切、堅掘   |
| L 72        | 後野鍛冶屋跡 | 後 野    | 鉄製遺跡        | 後野町775番地            |
| L 195       | 正蓮寺山城跡 | 後 野    | 城 跡         | 山城、郭                |
| L 208       | 瀬 城 跡  | 黒 川 瀬  | 城 跡         | 山城、郭                |

※島根県遺跡番号は島根県教育委員会2002『島根県遺跡地図 II(石見編)』による

第1表 周辺の遺跡概要



石疊検出状況

親墓」・「大中臣常信墓」と記されたものもある。

## 第2節 遺跡の概要（第3～5図）

調査地は浜田市河内町の浜田川から谷を登った位置にあたり、調査地の標高は約85～112mである（第3・4図）。なお、明治34年発行の地図（第1図下）に「唐谷坂」と記されているが、1883（明治16）年頃の黒川村誌（史跡探訪会1988『浜田の歴史と伝承』）には「河内橋 唐谷道に属ス。」とある。道としての遺跡名称は「唐谷坂道」としている。

唐谷坂道は浜田・金城（七条）間の街道跡で、近年まで利用されていた。この道は浜田広島街道（参勤交代道・浜田一佐野一今福一丸原一重富一市木一三坂峠一広島）の脇道にあたる浜田波佐道（波佐往還・浜田一河内・唐谷坂一大杉峠一水上谷一七条一波佐一傍示峠一広島）の一部である（第3図）。近世初めの絵図には浜田広島街道（参勤交代道）は記されておらず、参勤交代に伴って整備されていった可能性がある。一方、現在の唐谷坂道周辺を通る道（黒川一七条）は近世以前から利用されていた可能性がある（桑原2000など）。

道全体の概要是既に多くの文献にまとめられている（浜田市教育委員会1992・旭町1996・古谷建設環境研究室1999・桑原2000・金城町2003・唐谷坂保存会2003・㈳中国建設弘済会2004・樹林舎2006など）。

唐谷坂には上下2地点に石疊道が残り、今回の調査は下の石疊にあたり、付近は「音ノ峠」と呼ばれている。上の石疊は一部崩落しているが、幅約2.42～3.8m・長さ約120mと今回の調査地点に比べ大規模な石疊である。道沿いには峠家の屋敷跡と鯉塚新右衛門の石碑、光徳石大明神（どびん石）や、茶屋跡、二ツ道（分かれ道）などと伝えられる場所がある。

鯉塚新右衛門の石碑には「鯉塚新右衛門墓 元治二乙丑年（1865）正月 仏誕生日建之」と記されており、移転したものといわれている（浜田市教育委員会1992）。唐谷坂と関係する人物であるが、今回の石疊道や石垣との関係は不明確である。また、明治初期にこの道や橋の改修を行った高野七右衛門の碑が浜田川沿いの県道横にある。これらの人物と唐谷坂の関係は以下の主な文献に記されている。

河内道路工事係『河内新路橋略傳記』 明治九年（1876）

古谷建設環境研究室 1998年解説版

（浜田市立図書館 写 所蔵）

道路の改修は世運の開達と慈善家の力によりて初めて成るものにして、後世其の賜りを奏でせざる者あらんや、ここに、黒川郷字柿の木山唐谷の陥道を開削し衆人をした便を起さしめたる彼の鯉塚新右衛門なる人は中古の業にして人死し骨朽れたる今日と云えども未だ、其の名を忘れざるは慈善の徳の致す所にして、あに、怪しむに足りんや

那賀郡共進會展覽會協賛會1916『那賀郡誌』 P 285

高野七右衛門。天保二年三月黒川字河内に生れ、明治十九年六月十七日同地に死す。資性温厚仁慈貧窶にして事理をわきまへぬ母に事へつつ、力を公共事業に盡し、かねて貧民救助をなせり。

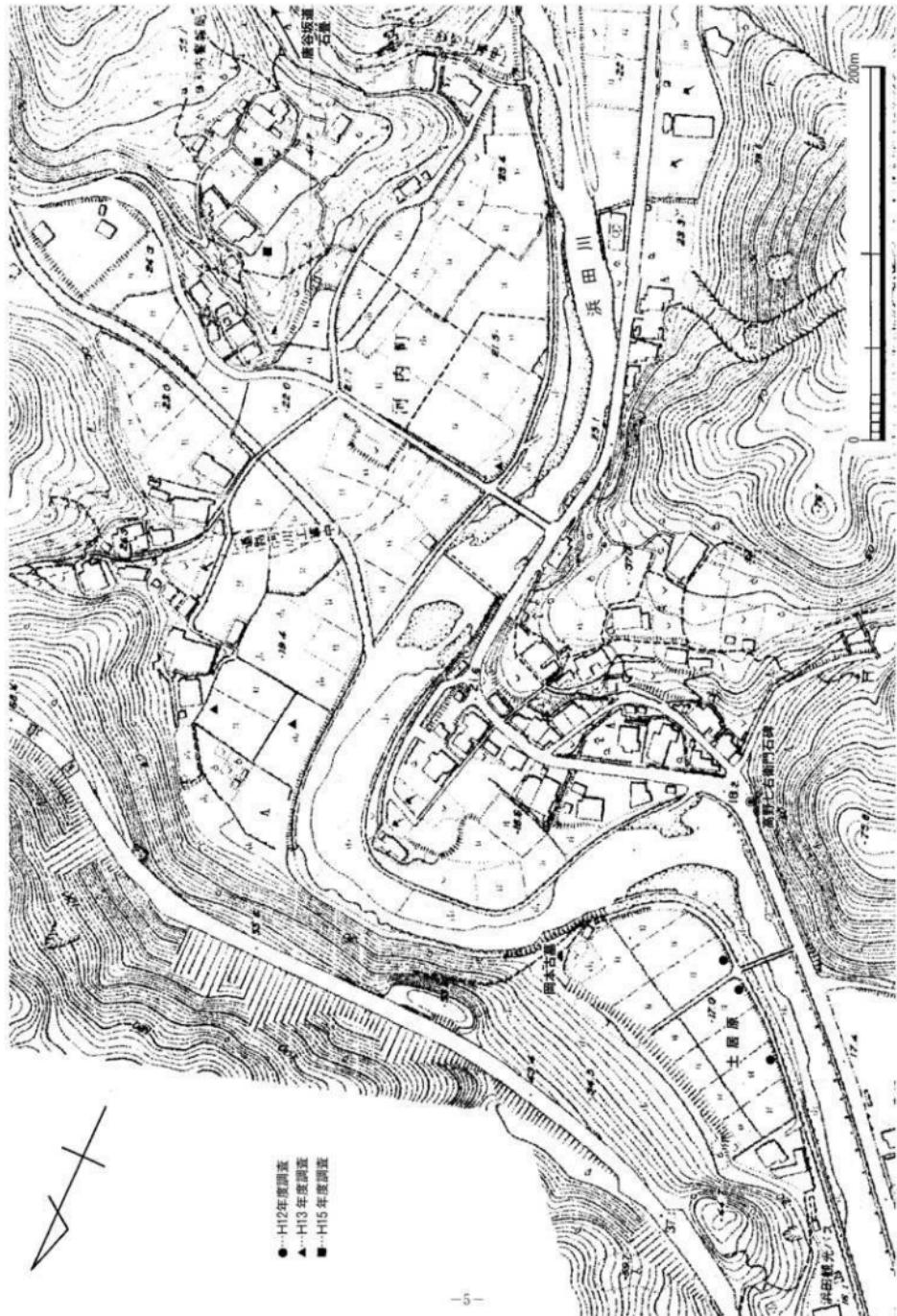
一、道路修繕 唐谷坂は、險峻なりしが河内住鯉塚新右衛門之を修理し交通の便をはかりし故、元治二年報徳碑を建てて其の功を頌せしが、明治五年の大震災に道路大破損し、通行する能はざるに至りしかば、七右衛門は更に大々的修繕を爲し、道路の中央所々に石を敷きて大に交通に便せり。

二、橋梁架設 唐谷坂より降りたる此方に、昔は河筋屈曲して河内下迄に三箇の小橋あり、洪水に流出すること度々にして、損害少からざりしかば、如何にもして此憂なからしめんと、河筋のつけかへに苦心し、中間に長九間幅七尺五寸の欄杆附橋を架し、且つ將來を慮り橋梁の術用として、字隱し畑に杉樹を植ゑ、架換の費として字寺山に上田三段歩を寄附して河内谷共有地とせり。明治二十年二月知事により木杯を下賜せられ、二十五年河内區一般より寄附地の中央に故高野七右衛門氏之碑と書せる記念碑を建設せり。

三、仁慈 村内り貧者に米或は鹽を施與せしこと屢々なり。」

天津亘 1925『石見誌』 P 482

第2図 試掘調査 位置図 (S=1/2500)



高野七右衛門 天保二年三月那賀郡石見村黒川字河内に生る。性温厚仁慈能く母に仕へ、明治五年唐谷坂（坂陥岐、河内鰐塚新右衛門修理し便にす、元治二年報徳碑建立、今年大地震に破壊す）を大に修繕し石を敷き、坂下川筋屈曲三個の小橋屢流失あり。茲に川筋の附替をなし、長九間巾七尺五寸の欄干橋を架し、橋梁桁用として字隠し畑に杉苗を植系、架換費として字寺山に上田三歳歩を寄付して河内谷共有地となす。

全廿二年縣知事より木杯賞與、全廿五年河内區民より高野七右衛門之碑と書せる記念碑を建設せり

大島幾太郎 1970『那賀郡史』旧那賀郡教育会 P 807  
辛谷道の二恩人碑

柿木山の上り口に近く、鰐塚新右衛門、高野七右衛門の記念碑がある。鰐塚新右衛門は黒川と七条との間の悪道を修理した人、元治二年（慶応元）建碑せられた。高野七右衛門は道路修理架橋に苦心し、後の架橋費用に田畠まで添附し、又貧民救助にも力を尽した人で明治二十五年建碑せられた。

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

調査前はほとんどが土砂と倒木で埋没しており、苔の付いた石列がみえる程度であった。ピンポールによる調査前の確認では、部分的な石敷状の遺構を想定していた。まず、倒木類や落葉を除去し、下側からトレンチを設定して部分的に調査を開始した。各トレンチで縁石を直線的に造る石疊道が確認され、大半が埋没していたことが明らかになった。予想以上に道に左右からの土砂が流入していたため、まず石疊道の規模を確認するため縁石の検出作業を優先した。道の長さを確定した後に側溝・周辺地形の確認のため部分的に周辺を拡張した。周辺の拡張は調査指導での指摘を受けた、道に伴う加工範囲を確認するために行った。石疊道の下部調査は市道として人の通行があることから部分的に断ち割り、そのまま石を戻して復旧した。

調査区の区割は、平野側（標高の低い地点）を下側とし、地形で1～6区に区分して調査を実施した。

石疊の部分名称は標高の低い下（谷）側からみて石

疊の「左」「右」、石疊の端に縁を描えて直線的に並べた石を「縁石（側石）」、両端の縁石の間に敷かれた石を「敷石」と表記する。

図面作成は石疊面を検出した状態でレーザー測量を実施し、調査区全体の1/100・1/50の平面・縦断面・石垣立面の陰影図を作成した。陰影図は平面の石疊に対して斜め方向にレーザーを当てて計測するため、縁部分がやや黒くなる。そのため現地で陰影図を元に石疊の1/25の平面図を部分的に作成した。等高線はレーザー測量による図面を基に、調査区拡張後に補足したものと併せて調整した。

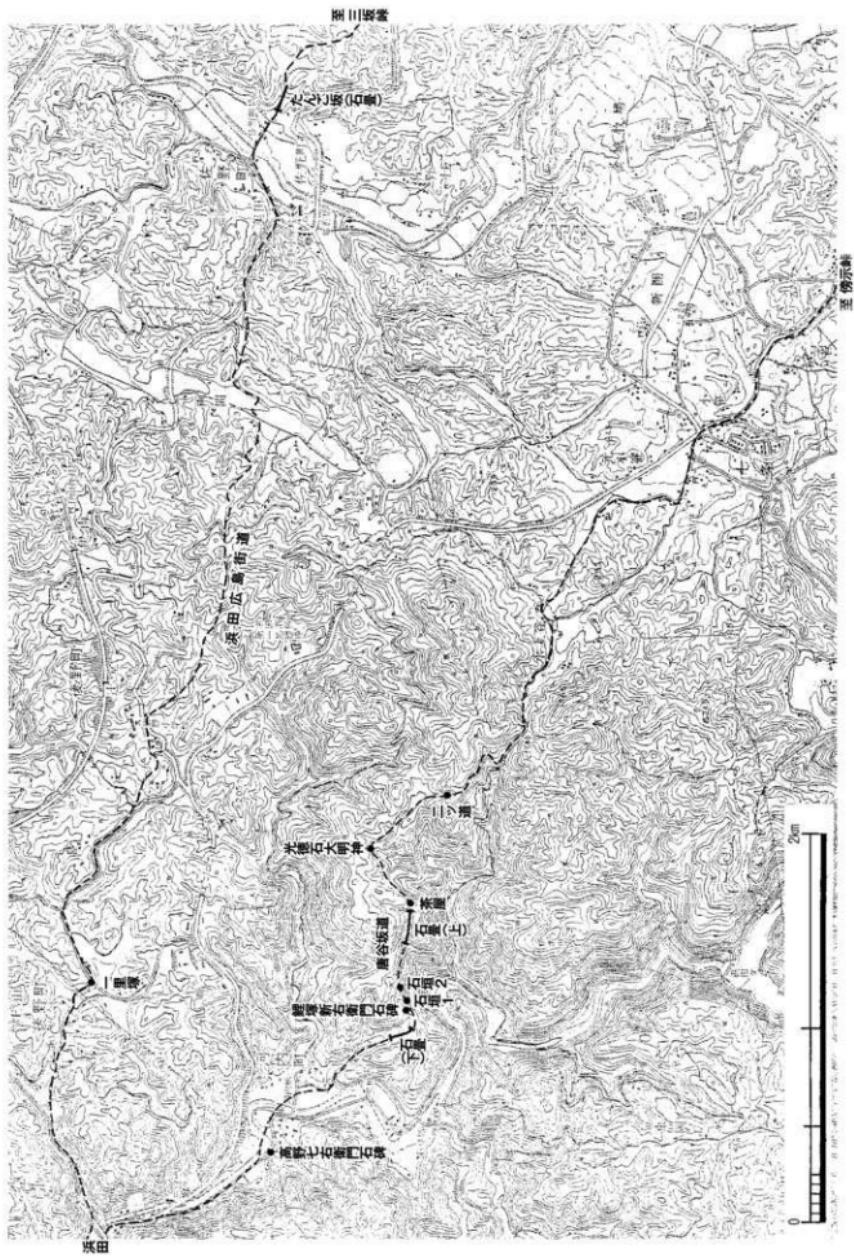
#### 第2節 調査区の概要（第3～18図）

現道の左右に埋没していた石疊（幅1.3～2m）が確認され、縁石を左右に配置し、間に石を敷く典型的な石疊道であることが判明した。石疊は大型石（最大長80cm以上）、中型石（最大長30cm～80cm未満）で縁石を決め、間を中型石から小型石（最大長30cm未満）の敷石で埋めている。目立つ石は中型～小型石で、最大の縁石は87cmである。路面の石は平坦に敷かれているが、板状の平坦な石は少なく、接地面は不整形な石が多い。比較的整然と並ぶ1～4区の縁石は右側で約359個・左側で約322個であった。石の縁を斜めに描えて幅約25cmの排水溝を3ヶ所造っている。外側の掘形と縁石の間が側溝となっているが、浅く凹んで溝状になっている場所もある。

石疊の石材は大半が流紋岩で石英安山岩と安山岩質凝灰岩が少量認められる。基本的に周辺の露頭や地山に含まれる石で、周辺の自然石を用いている。ある程度石を割って面を描えたような石もあるが、全面切石状の石はない。なお、縁石は大型の流紋岩や風化していない硬質な石を用い、敷石に地山に含まれる風化した石や小型石を用いる傾向が見られ、特に傾斜が緩やかで長い3区に目立つ。

石疊は約97m続き、地山が粘質土から岩盤（流紋岩質角礫凝灰岩）に変わり傾斜がきつくなるあたりから道幅が狭くなり、最後には岩盤に約40mの範囲で断続的に横幅50cm・30cm間隔で階段状の刻目をいれるようになる。刻目の中に木が残るものがあり、滑り止めに

第3図 唐谷坂道・浜田広島街道 位置図 ( $S=1/25,000$ )



横木を入れていたと考えられる。

遺物は石疊上面の堆積土や側溝からコンテナ1箱分出土し、近現代の陶磁器が大半であった。

第1節にも記しているが、調査区の区割は、平野側（標高の低い地点）を下側とし、地形で1～6区に区分している。調査区の比高差は23.17mである。

#### 1区（第7図）

長さ14m・比高差2.66m・勾配19%・石疊幅1.5～2m

平野部から谷を登ってきた場合の石疊始点にあたるが、石の多くが流出して遺存状況が悪い。縁石が残っている下側始点は標高約86mである。細長い石を使って組んだ幅30cmの斜め方向の排水溝が1ヶ所ある。石は左側半分の谷側への流出が目立ち、左側に丸い川石を縁石状に立てたり、小さい石が密に敷かれている場所がある。石疊左の谷川からの石を用いて補修したと考えられる。これまで石疊は川石を用いたとされていた（桑原2000など）が、この部分を除けば基本的に山石を使った石疊道である。右側の縁石は長辺を側縁に合わせる石が多い。

調査区を一部左右に拡張したところ、左側は山の斜面を削って幅40cm程の浅い縦排水溝を造り、右側は石と土の混じる面が深くなる。右側の石の一部は石列状に見え、粗い石組の縦排水溝か古い石疊の縁石の可能性もある。しかし、2段に積まれているものもあること、傾斜していること、石面が一部上面の縁石の下にあること、やや湧水があることなどから、上の石疊面を水平にするために右の湧水がある低い部分を石や土で埋め立てて底上げした可能性もある。

#### 2区（第8図）

長さ41m・比高差6.56m・勾配16%・石疊幅1.9m

傾斜のきつい切り通しの道に石疊が造られている。上方は大半の石が流出しており、残った石も浮き上がりでおり遺存状況が悪い。石が流出した後の地山面をさらに水が流れるため、調査前から抉られた黄色の地山面が露出していた。残った敷石の重なりを見ると、下側から前の石に重なるように石を置いた場所がある。後述の3区では石疊の構築は基本的に下側から

行なったと見られ、この部分は流出が激しく部分的に補修したと考えられる。

右側からの崩落土が多く、その後竹林になっており一部の縁石列は検出できなかった。左側の縁石も上側に行くと流出したり、敷石とあまり差が無くなる。傾斜がきついため、簡略化して石疊を敷いた可能性もある。

#### 3区（第8～10図）

長さ43m・比高差5.01m・勾配12%

石疊幅上1.3m・下1.6～2m

切り通し部分を過ぎた標高約93.5mあたりから緩やかな傾斜面になり、石疊が造られている。左側は急斜面で右側は緩やかな斜面になっている。土層を見ると、左側からは石疊上に崩落土が流れ込み、右側は杉を植林した頃に整地したと見られ、石疊の右側排水溝上に現在の表土が被っている。

全体的に浅く埋まっており遺存状況が良い場所である。3区下から中央にかけて縁石は大型～中型石で直線的に揃えるのに対し、敷石は小さくて隙間が目立つ。道の傾斜が緩いため、密に石を敷く必要が無かったのかもしれない。縁石は大～中型石は長辺を側縁に揃え、中～小型石は短辺を側縁に揃える傾向がある。

石の縁を斜めに揃えて排水溝を上下2地点に造っている。下の排水溝は石の隙間が多く粗い印象を受けるのに対し、上の排水溝は大型の石を使ってしっかりと造っている。

部分的に石疊の下を調査したところ、3区下では片側に溝のある2～5cm大の小石と灰色粘質土の混じる面（幅0.9m以上）、3区中央では両端に溝のある幅1.4mの面が確認された。地山面の側溝も石疊縁石に重なる場所で見つかる。面的に確認していないので断言しにくいが、石疊道に改修される以前は側溝をもつ小石が敷かれた道があった可能性がある。

石疊はその上に灰色系の土や地山に近い浅黄色系の土を盛りながら石を配置している。盛土は10～25cmほどで互層状にはならず、中～小型石を含む場所もある。石疊左右の排水溝は掘り込んだというよりも石を敷いて路面を高くした際に左右に残った場所という印象で

ある。3区下では左の縁石の高さを揃えるために2段に重ねた場所があり、地山面も左側へ傾斜している。

上の排水溝を境に石疊幅が狭まり、幅1.3mになる。この地点には下方の石疊の上方延長に敷石の一部と見られる石列があり、石疊を補修して幅を狭めた可能性がある。元の幅広の石疊の右側縁石をはずし、幅の狭い石疊の縁石に転用した可能性がある。

幅狭の石疊の右側には3区下と同様に地山面直上で小石の貼り付いた面が確認された。この面も石疊以前の道の可能性がある。

石疊面の石を外す場合、下側の石に上側の石が重なっていることが多く、基本的に下側から石を敷いていったと考えられる。

標高99.25m辺りから傾斜がきつくなるため、石疊面は流出が目立つようになる。3区上方の浜田川沿いから急峻な山斜面を登る道との分岐点を調査したが、地山面は緩やかに傾斜するのみで、道に伴う明確な加工は見られなかった。

#### 4区（第10～12図）

長さ21m・比高差4.15m・勾配20%・石疊幅1.7m

傾斜のきつい斜面に石が流出して塊状に石疊が残る。この区から地山が岩盤（流紋岩質角礫凝灰岩）になる。岩盤面は石疊右端から急傾斜しており、岩盤を加工した面の右端に縁石を決めて石疊を造ったと考えられる。なお、残存する石疊は縁石を立てたり、敷石を重ねて置いたために立てた縁石より敷石が高い場所がある。3区の典型的な石疊とは石の用い方が異なる。地山が岩盤で滑りやすく傾斜も急なために何度も補修した可能性がある。

降雨時は強く水の流れる場所のため、縦方向の溝が人工的に掘られたものかは明確ではない。横方向の溝は、その場所の石疊が途切れていることから排水溝と考えられる。

4区の調査前は石疊のある凹んだ面とやや高い右の凹んだ面があり、道が2列あるように見えていた。

近年は右側の一段高い位置を通行していた。右側に向けてトレンチ状に拡張したところ、最新の道の右側にややずれて幅約1.3mの道状の溝があることが判明

した。道の可能性のある凹みは少なくとも3列あることになる。岩盤面で検出された2列の前後関係は不明である。

石疊は途中から流出して途絶え、道幅が狭くなり傾斜が急になると、最後に幅約0.6mで石を横2列に並べた石疊がある。最後の石疊面は調査中に雨が降ると最も土砂が溜まった場所である。この石疊が終わった地点から上には、道状の凹みの下に階段状に刻目が彫られている。後述の5区と併せて約40mの範囲で断続的に横幅50～55cm・15～45cm間隔で刻目をいれている。刻目は平均で横幅50cm・30cm間隔のものが多く、68本確認できた。道の傾斜は緩くなるが、地山が岩盤のため滑り止めのために造られたと見られる。

#### 5区（第13・14図）

長さ31m・比高差3.83m・勾配12%

道幅約1.1～1.3m

岩盤を切り通した道に4区上から続く階段状の刻目がある。調査前は切り通し斜面に岩盤が苔むして露出していたが、路面は薄く土砂が堆積しており刻目は見えなかった。一部の刻目は中に木が残っており、滑り止めの横木を入れていたと考えられる。基本的に溝状にしっかり刻まれているが、両端のみ彫られている刻目もある。いずれの刻目も両端が深く中央が浅くなり、ノミのような工具で両端から彫ったと見られる。

岩盤の道の途中には異なる質の流紋岩がまとまって置かれている場所がある。刻目がない場所で滑りやすい場所に部分的に石を置いた可能性がある。

周辺に一部拡張したところ、左側の切り通し部分には岩盤の上に灰褐色土と灰白色系の土（第14図・第4・5・6層）が認められた。土壌状に切り通しの際の掛土が盛られた可能性もある。右側は岩盤が節理に合わせて直線状に割れており、加工範囲は特定できなかった。

#### 6区（第15・16図）

長さ12m・比高差0.96m・勾配8%

切通し道の5区を過ぎると、左右に平坦面があり中心が道で凹んでいる。凹みは地表面と直下の岩盤面で上下2面認められた。再び傾斜が緩くなり道は溝状にな

り、石疊や刻目は認められない。道状の凹み内の地山直上から $2.3 \times 3\text{cm}$ の銅金具（巻頭図版参照）が出土した。

また、6区の上方20mの道が屈曲する場所で道を横断する $1\text{m} \times 5\text{m}$ の調査区（6区上トレーニチ）を設定した（第16図）。引き続き道状の凹みは確認できるが、石や刻目は確認できなかった。左側の段上は畠と見られる平坦地で、右側は崖面で急傾斜している。最新の道は凹みの右側の平坦面を通行しており、道の可能性のある凹みと併せて面は少なくとも2列ある。

#### 石垣1（第17図）

上標高約113m・長さ6.4m・高さ1.7m・幅0.9m

旧峠家の宅地跡の右手にあり、道状の凹みは確認できない。流紋岩の岩盤と流紋岩混じりの崩落土がある斜面に石垣を積んでいる。裏込も同様の流紋岩混じり土のため判別しにくい。石垣の石材も同様の石である。

石垣は中央に約50cmのやや大きめな根石を置き、端側は小さめの石を用いている。天端石も中央に大型の石を使っており、一番高く積む中央を比較的丁寧に積んでいる。石垣に向かって右手（標高上側）は小さめの石を用い、一部斜めに谷積状に積んでいる。2個単位程度で水平に積む場所もあるが、目地はほとんど通らない。直方体の石は少なく、ほとんど加工していないと考えられる。このため石垣の面が揃っておらず石の間に隙間が多い。

周辺地形からみると、元々幅1.9m程の道が石垣で約1m広がったよう見える。この地点は山頂に登る道との分岐点で家や近代の炭窯跡、貯蔵用の横穴もあり、通行が多いため道を拡幅したと考えられる。

#### 石垣2（第18図）

上標高約121～122.8m・長さ15m・高さ0.6～2m

幅1～1.5m

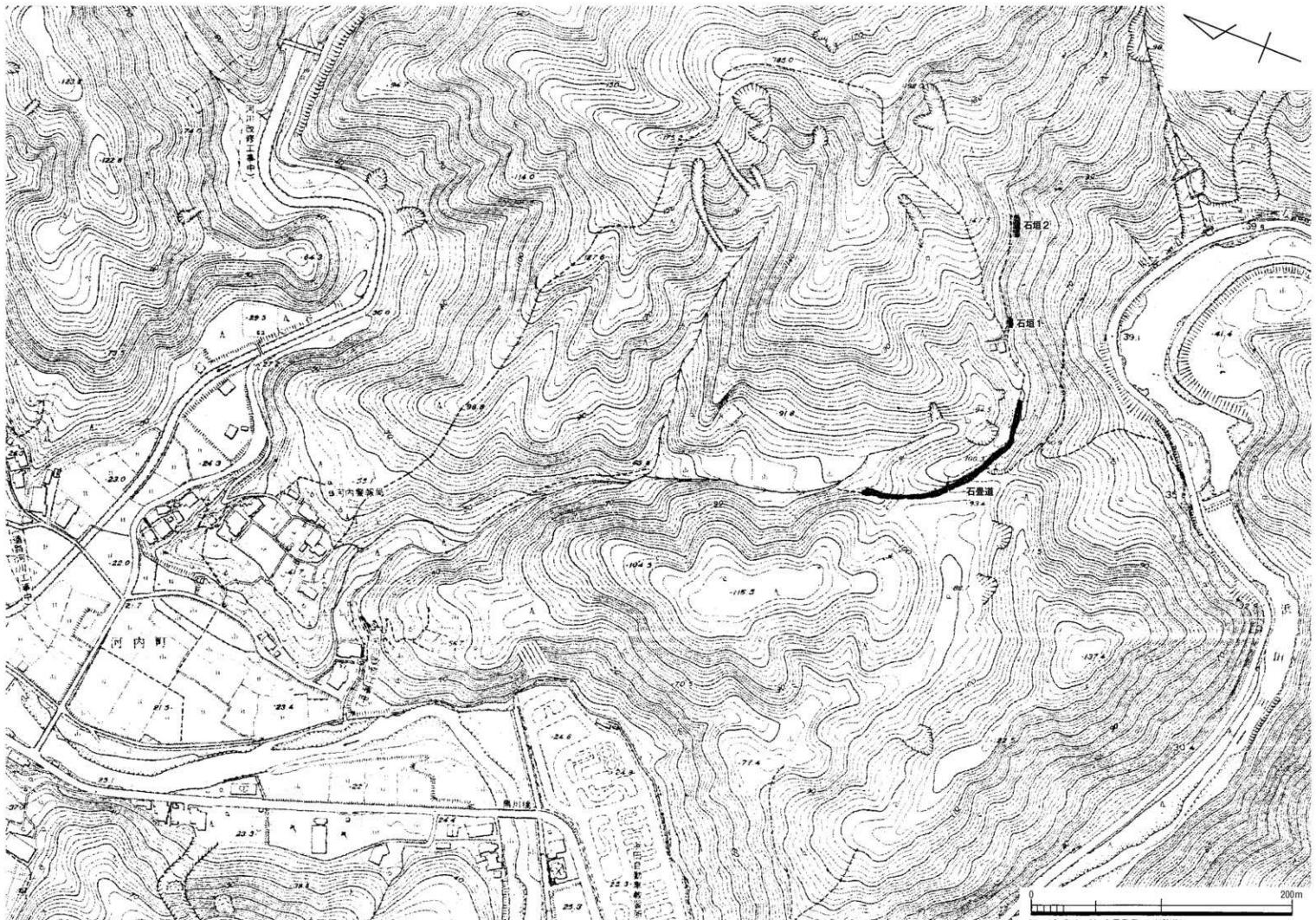
石垣1から約70m登った地点にある。石垣1と2の間は土砂崩れにより当時の道が残っておらず、右側は崖、左側は山が切り立った細い山道になっている。道状の凹みは確認できず、完全な山道である。上の崖側で木製電柱の痕跡が確認された。

石垣1と同様に流紋岩の岩盤と流紋岩混じりの崩落土がある斜面に石垣を積んでいる。裏込も同様の流紋岩混じり土のため判別しにくい。石垣の石材も同様の石である。

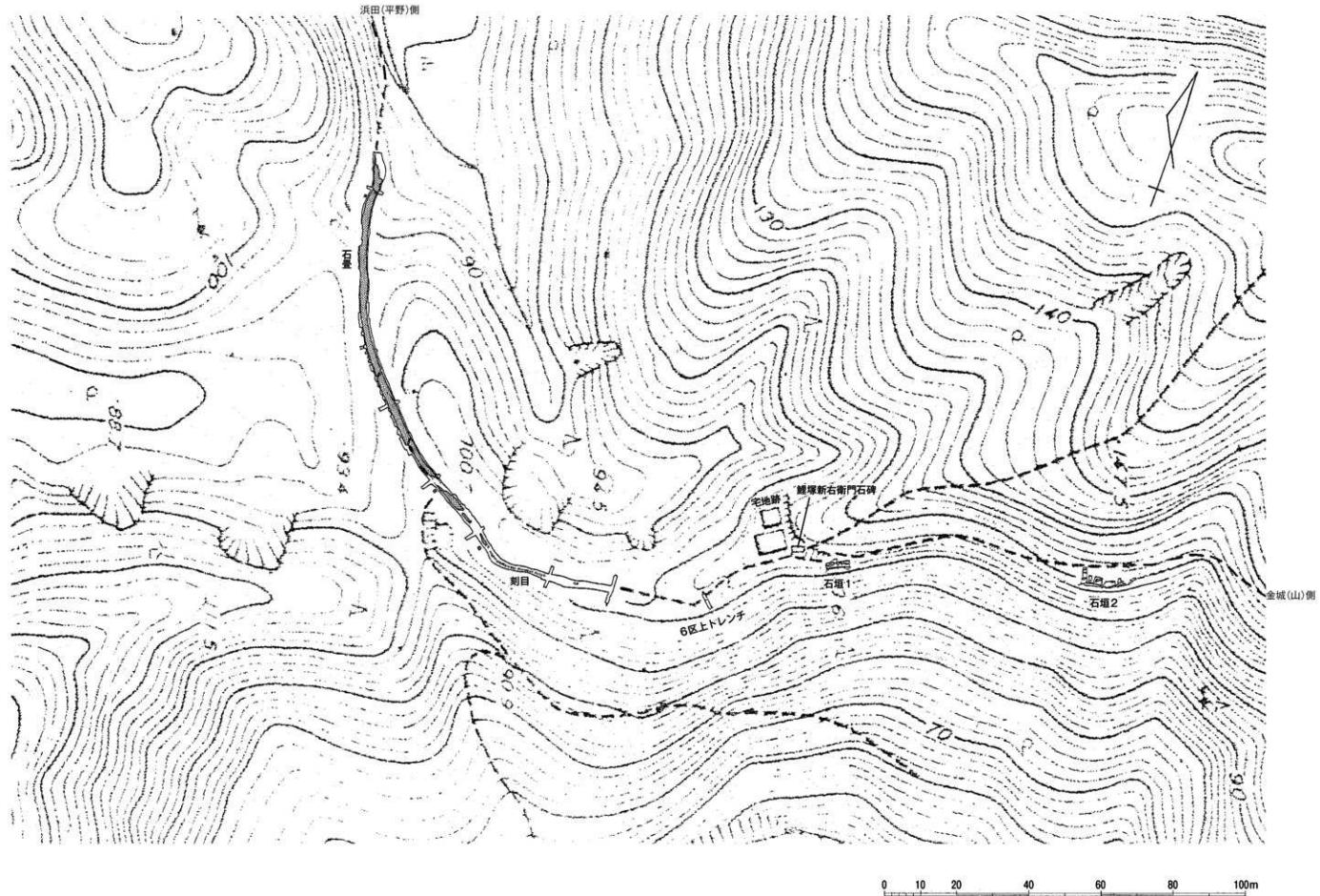
石垣は正面から見ると斜め斜面に築いているため向かって左側（標高下側）が高く、右側（標高上側）が低い。根石は高く積んだ左側は約50cmのやや大きめな根石を置き、右手は小さめの石を置いている。天端石は左端と中央に大型石を置いている。特に左側の天端石は約1～1.3m四方と大型である。中央は大きめな石を積んでいるが、左側は小さめの石が多い。右側は小さめの石を用い、一部斜めに谷積状に積んでいる。右端は石垣の高さが低いため、大きめの石を簡単に積んでいる。中央の下側に水平に積む場所もあるが、全体で目地はほとんど通らない。直方体の石は少なく、ほとんど加工していないと考えられる。このため石垣の面が揃っておらず、石垣1と比べてさらに石の間の隙間が目立つ。

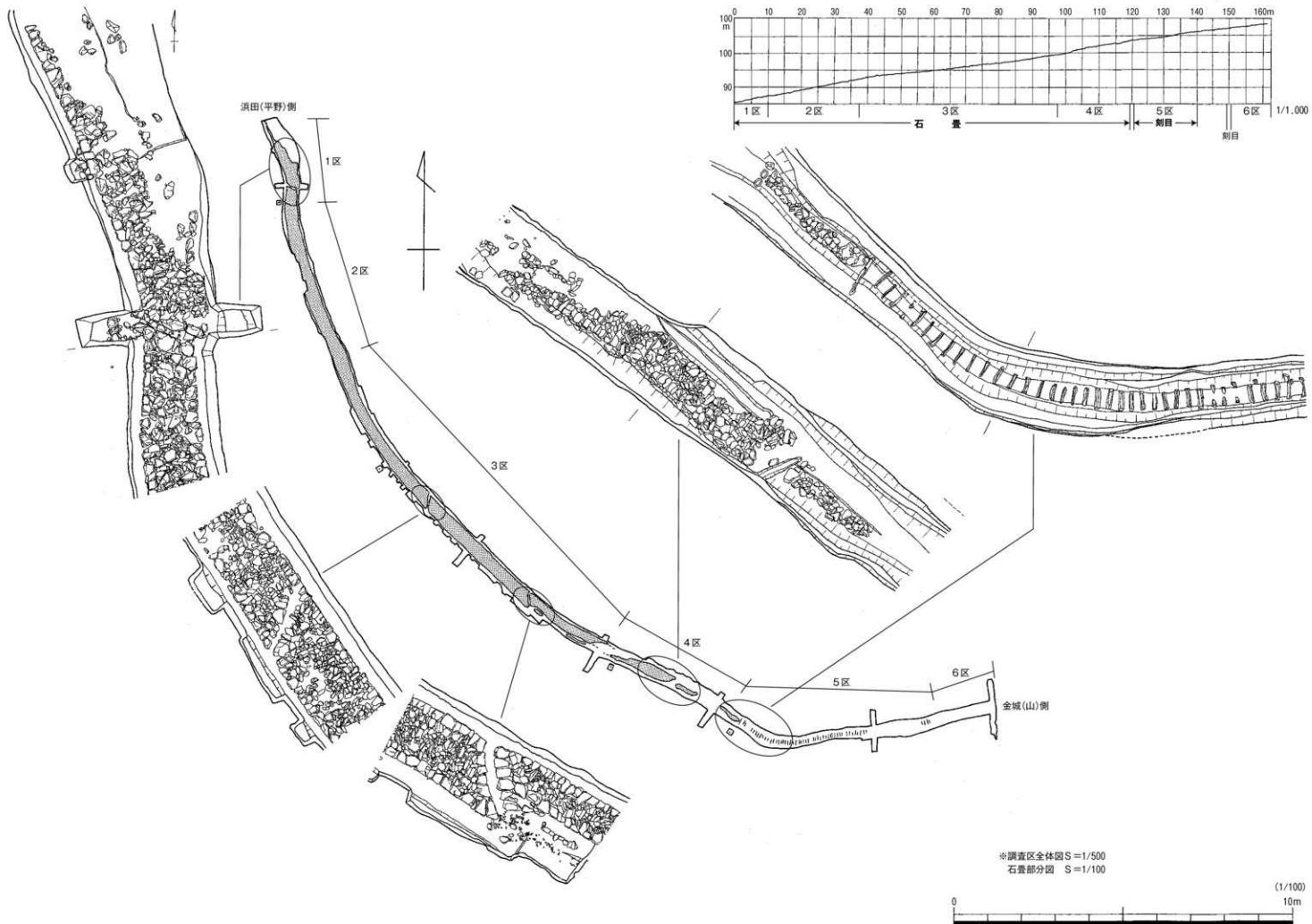
周辺地形からみると、元々幅1.5～2m程の道を石垣で約1.5m拡幅している。この地点は左側の山側からの崩落が激しく、崖のある右側へ道を拡幅したと考えられる。

第4図  
調査区周辺図(1)

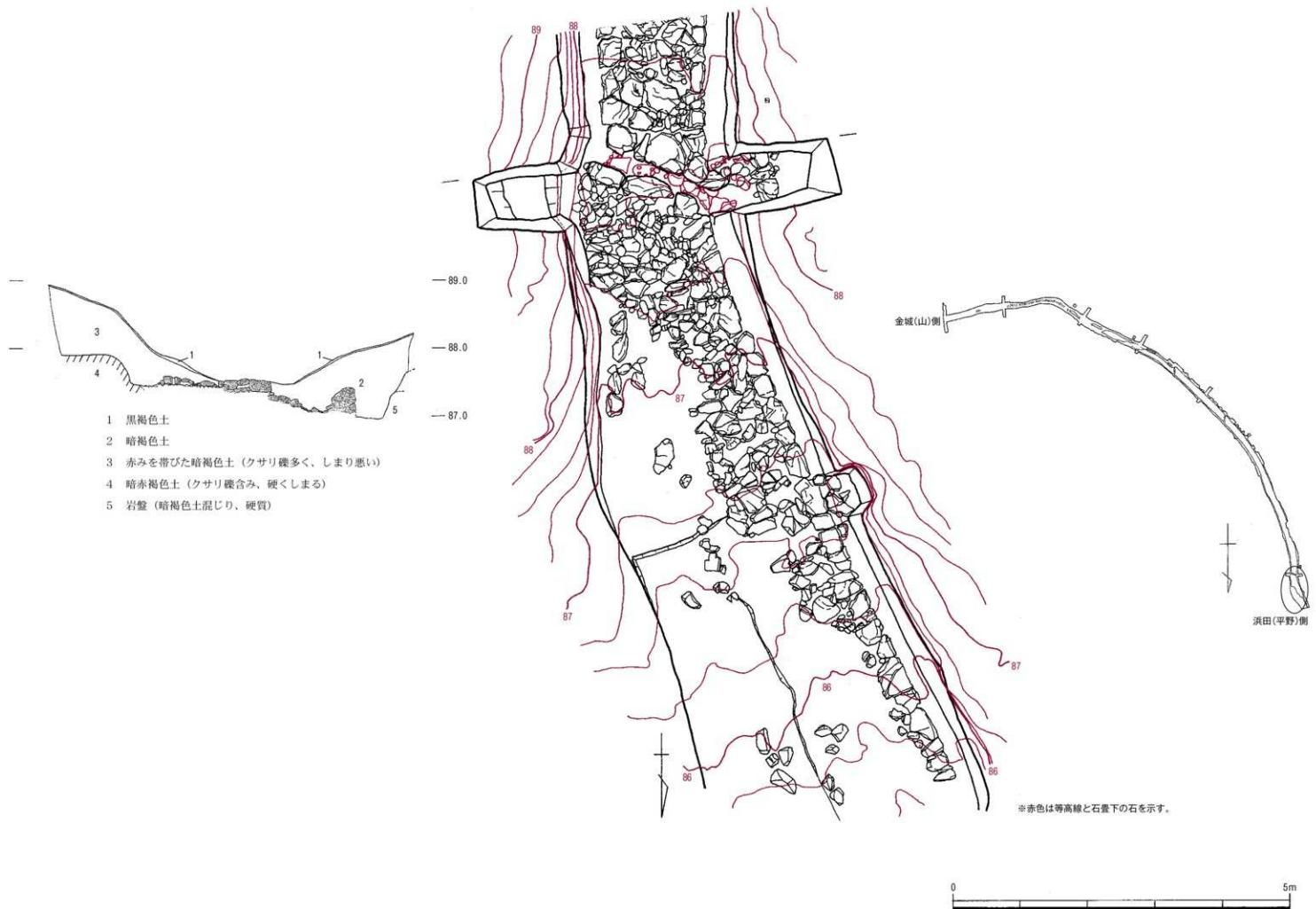


第4図 調査区周辺図(1) ( $S=1/2,500$ )

第5図 調査区周辺図(2) ( $S = 1/1,000$ )



第6図 石畠道実測図



第7図 石畠道実測図(1区)



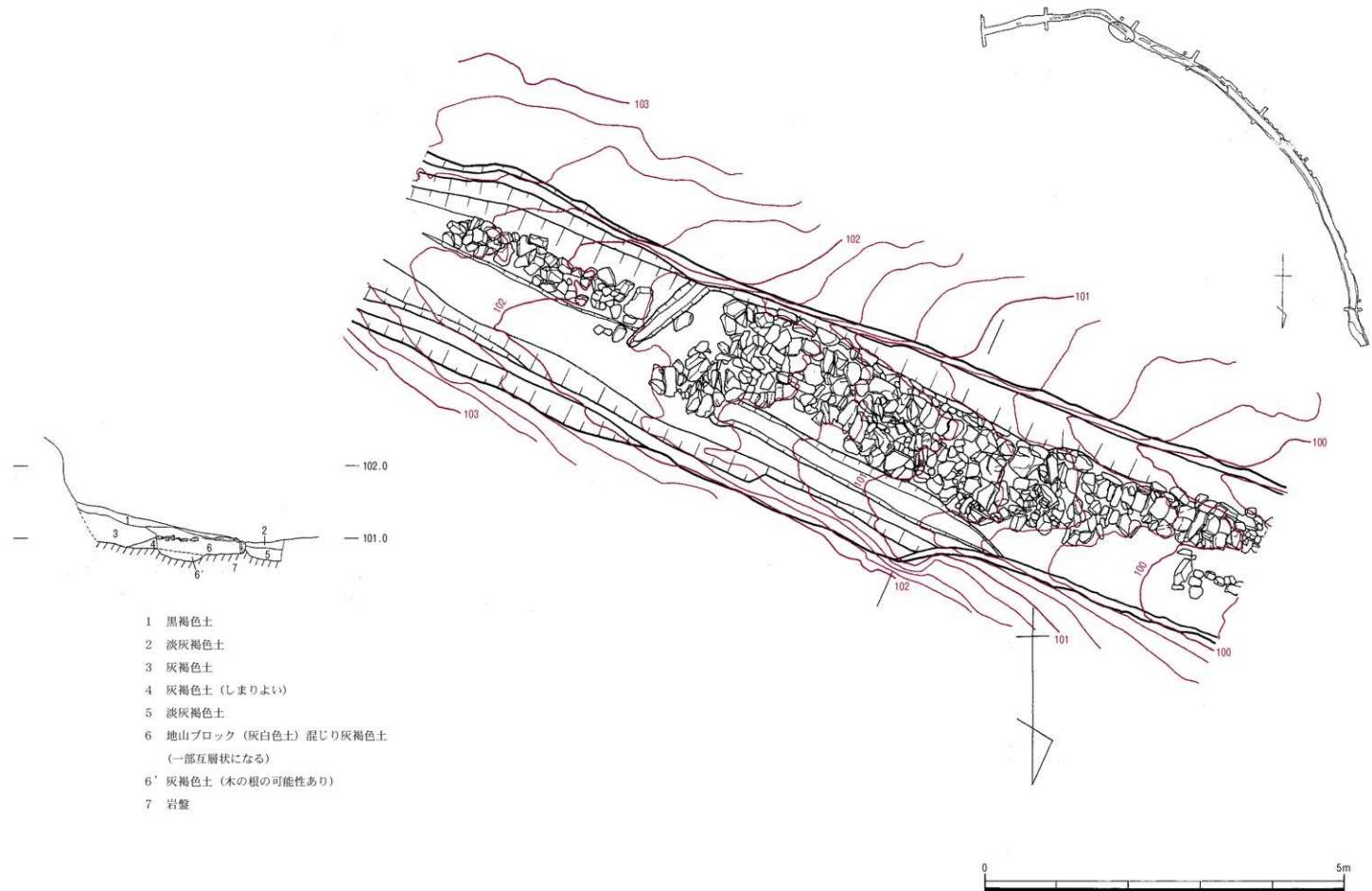
第8図 石畳道実測図 (2~3区中)



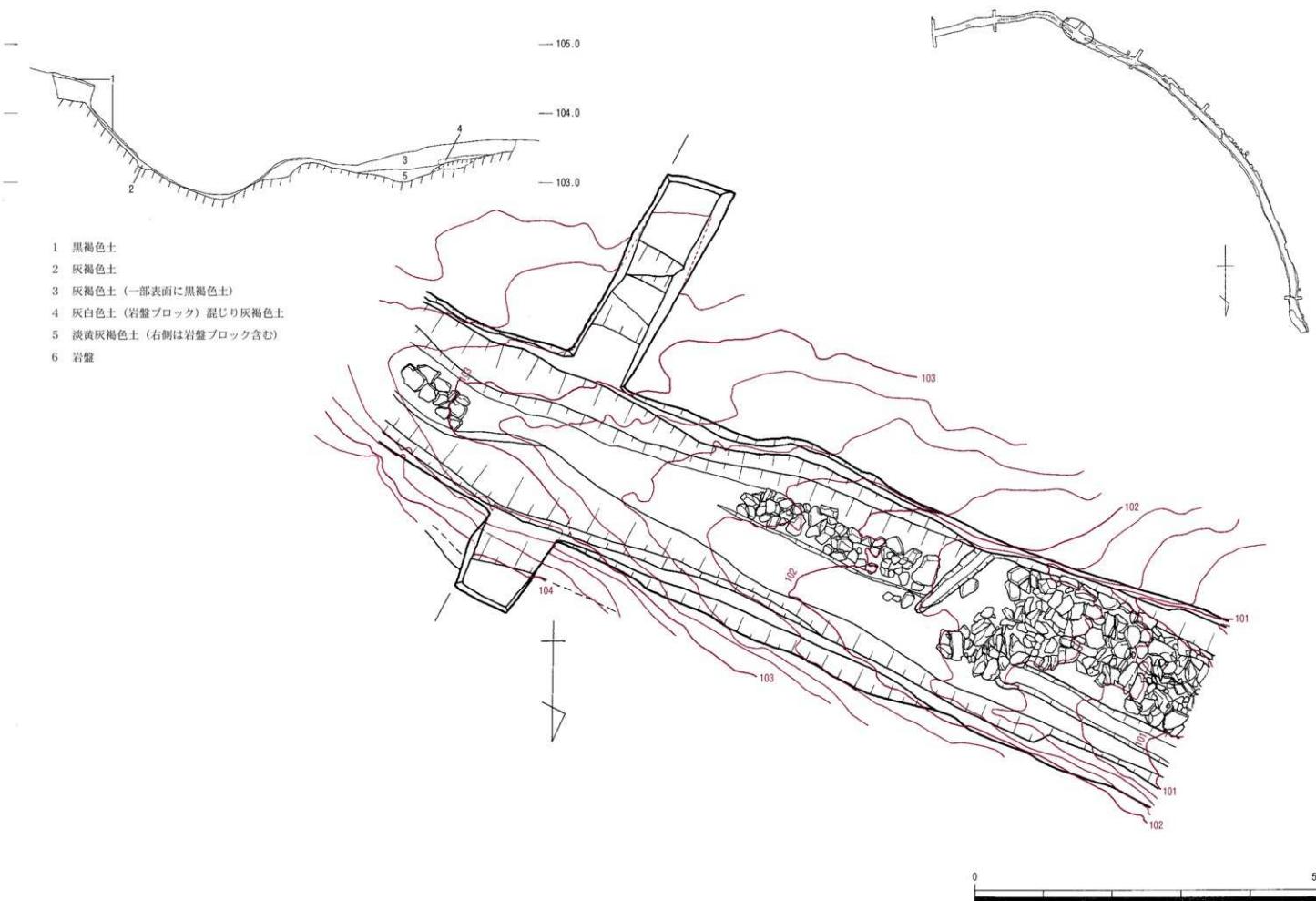
第9図 石畳道実測図(3区上)



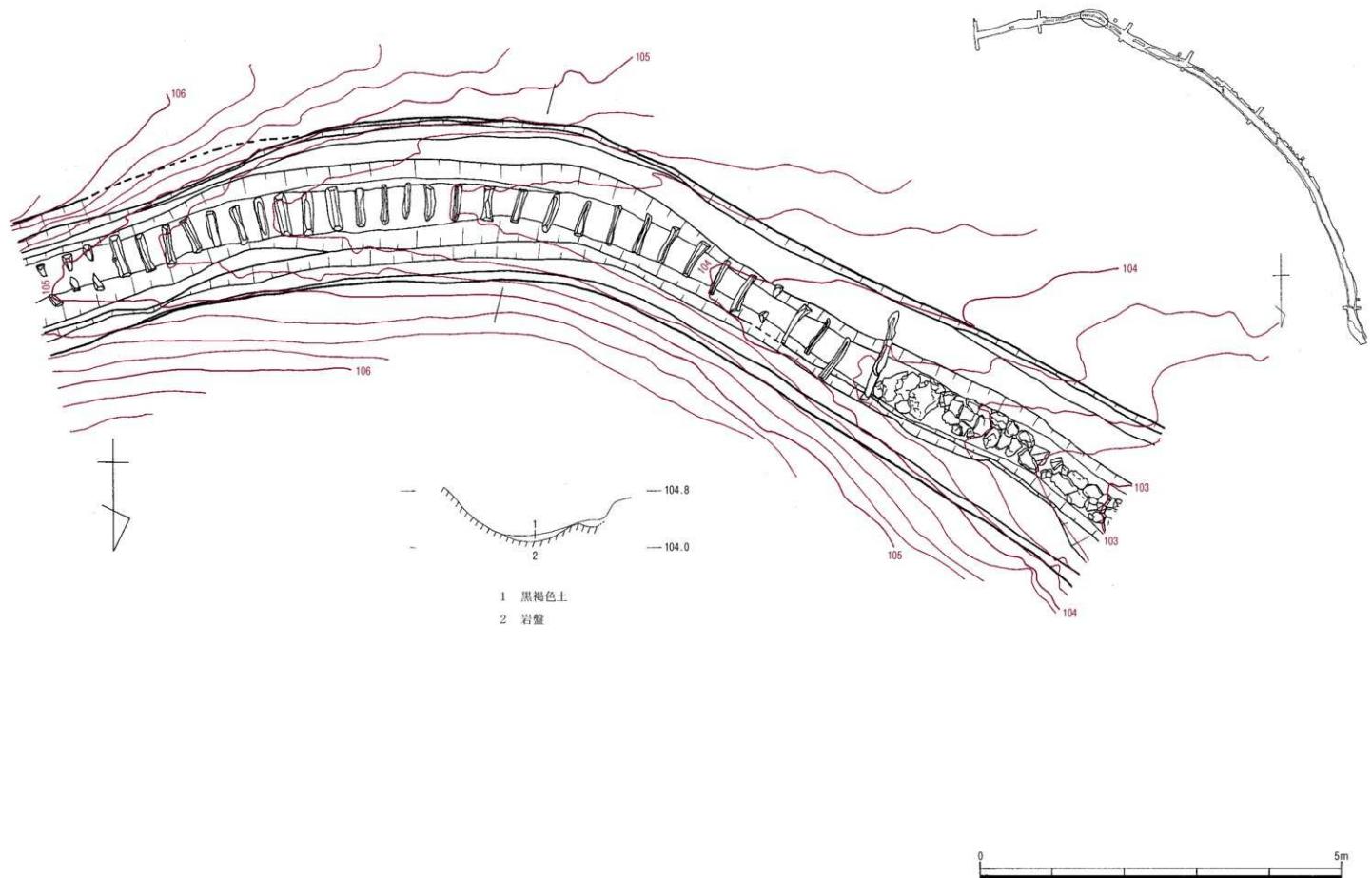
第10図 石畳道実測図 (3区上～4区下)



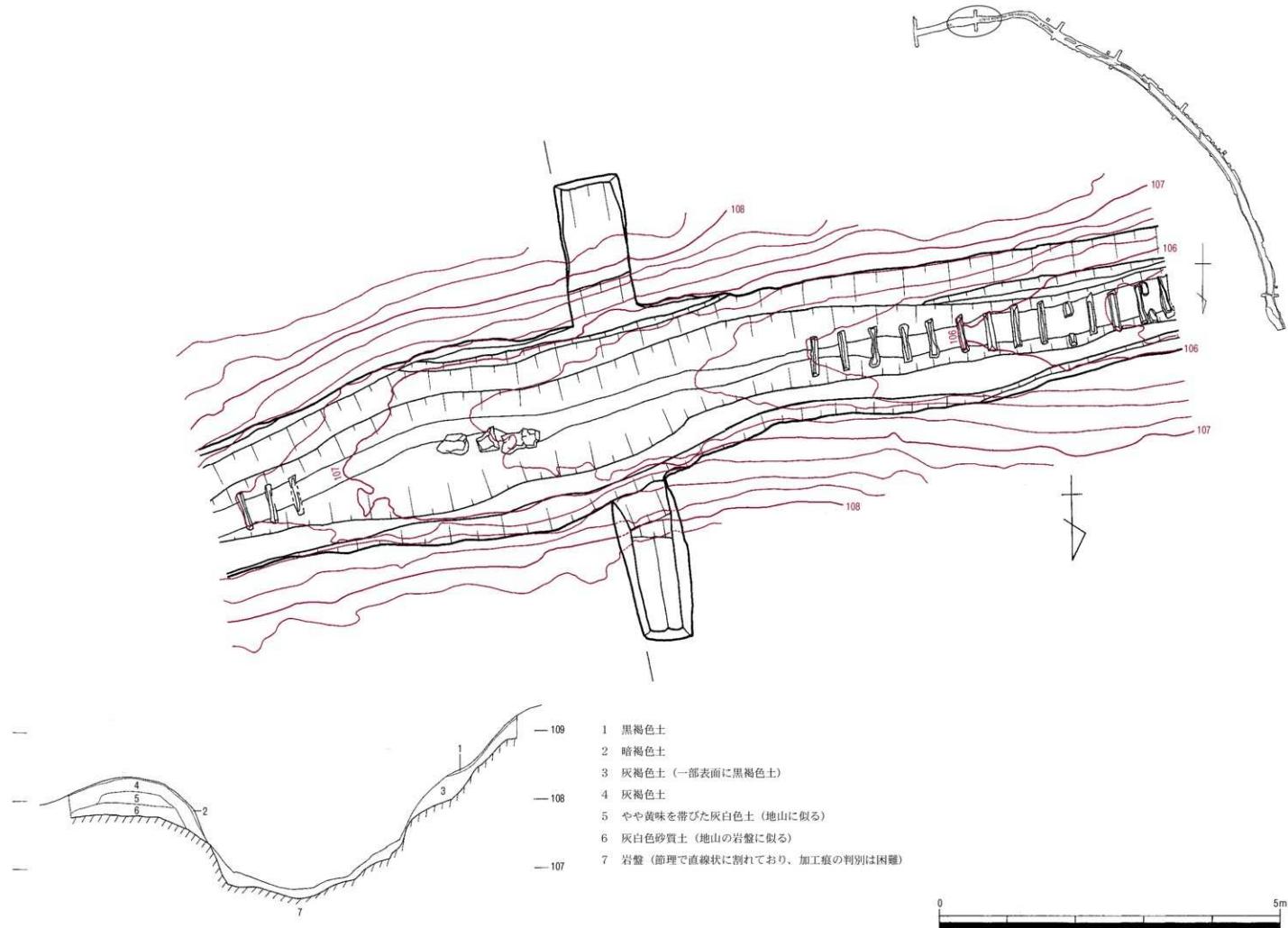
第11図 石畳道実測図(4区)



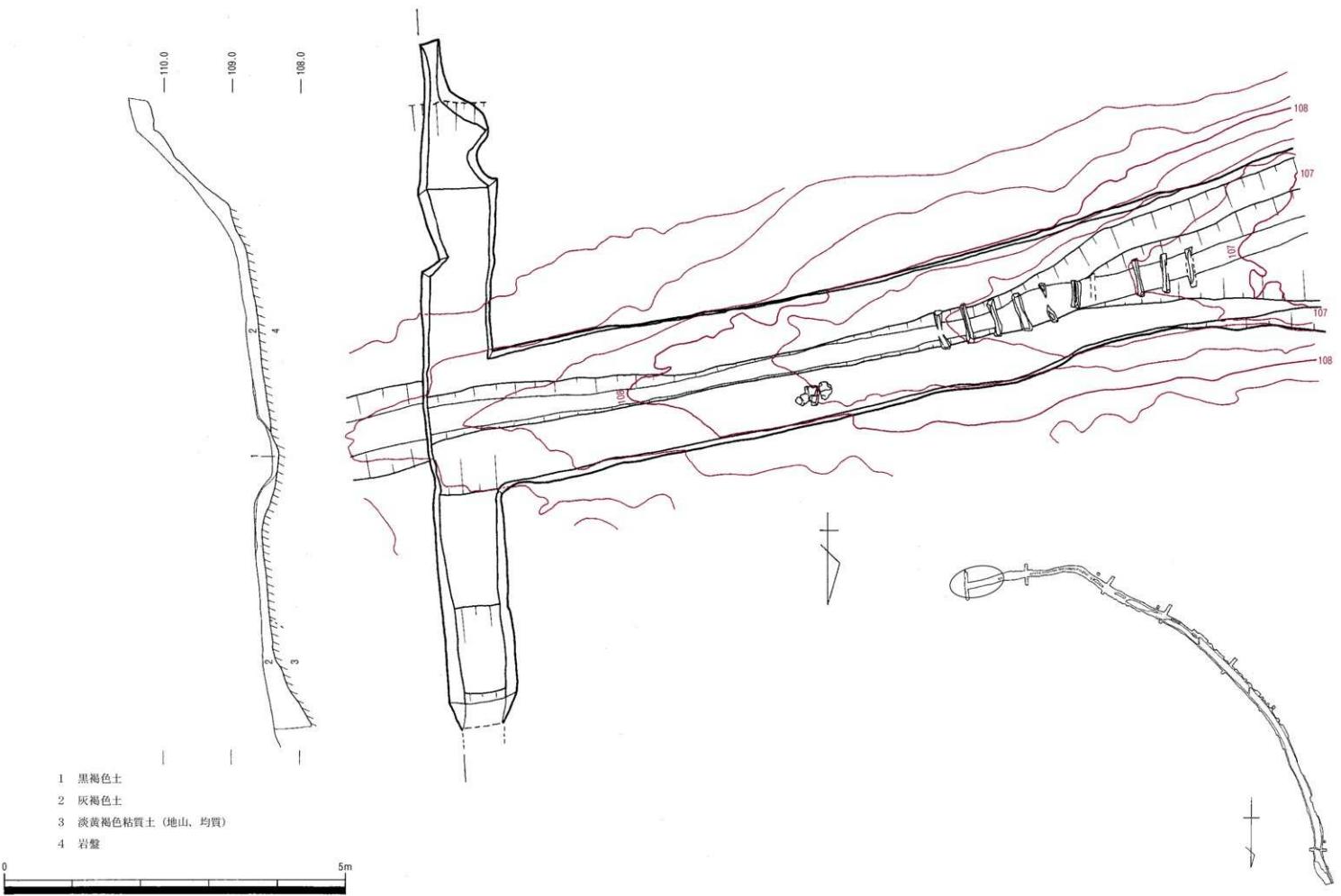
第12図 石畝道実測図(4区上)

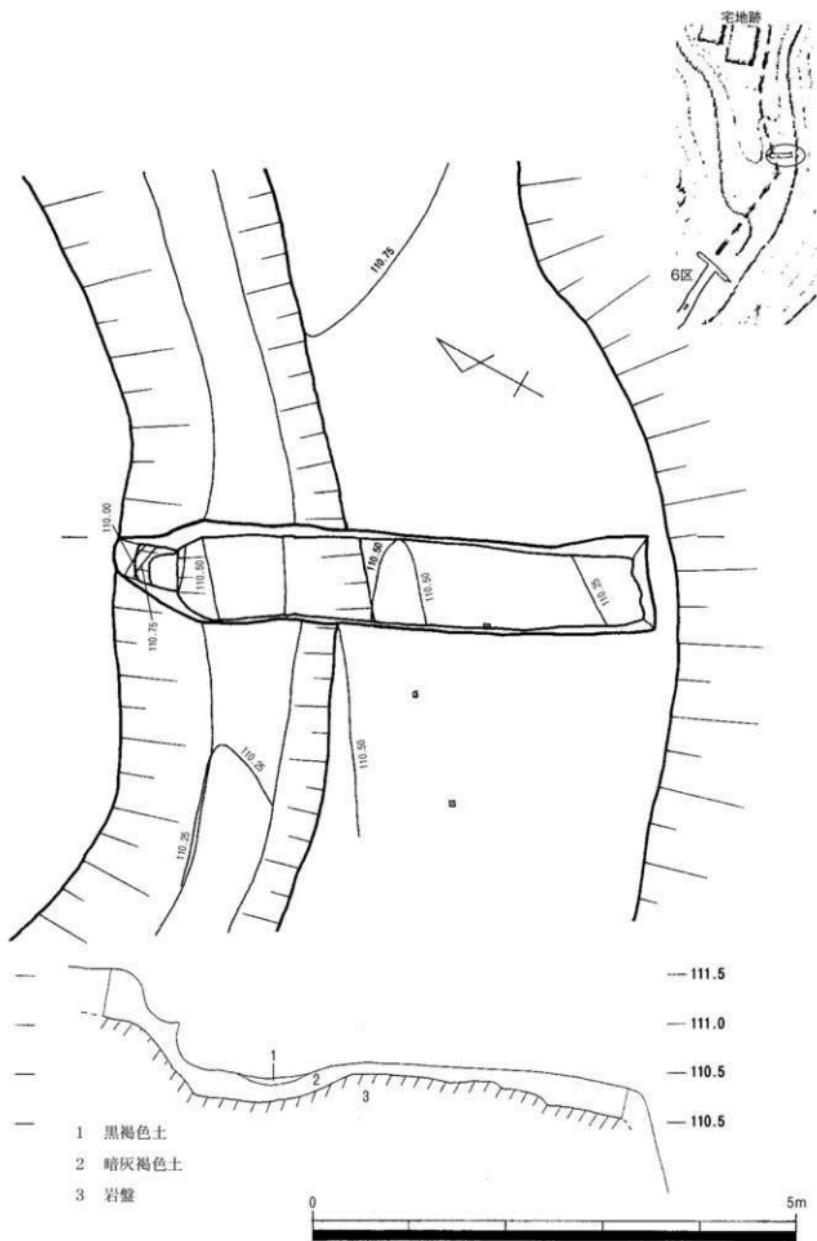


第13図 石畝道実測図(5区下)

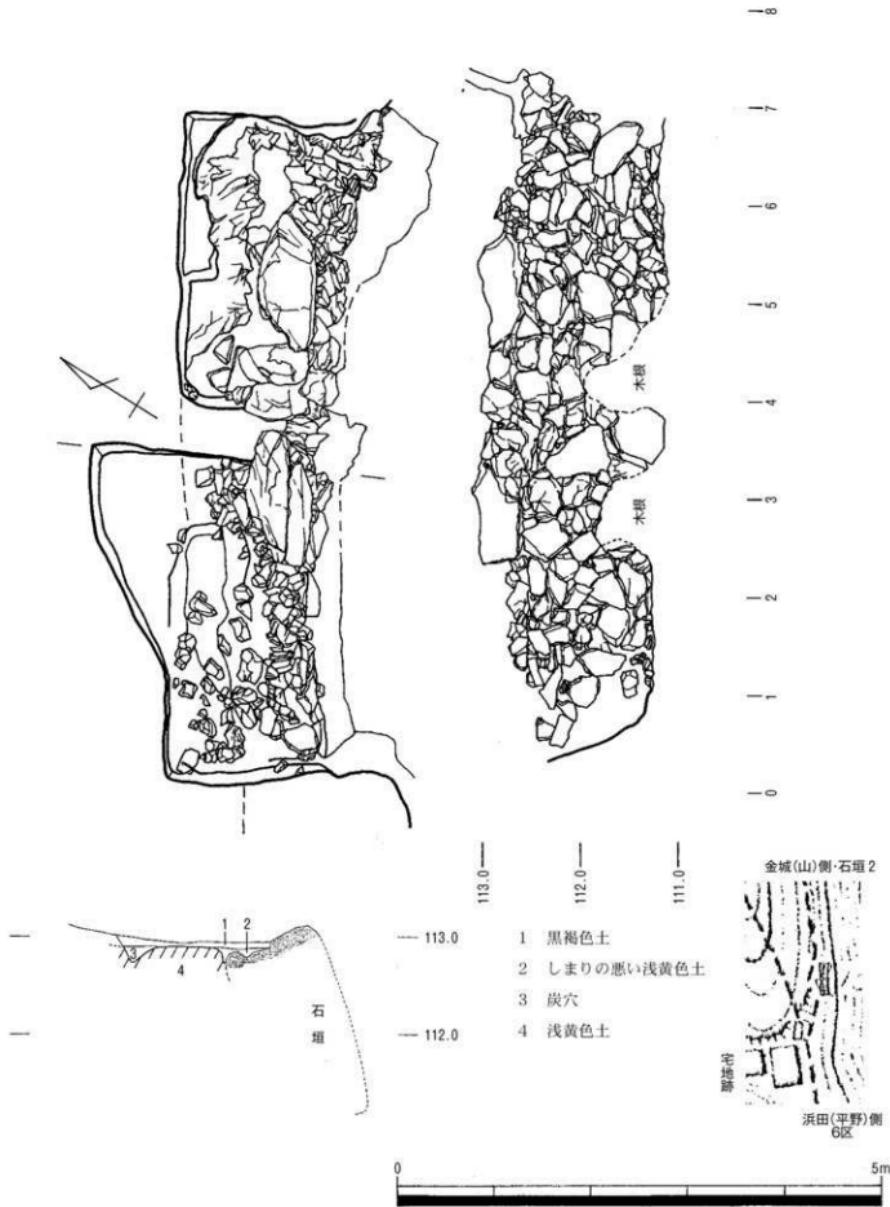


第14図 石畝道実測図 (5区上)



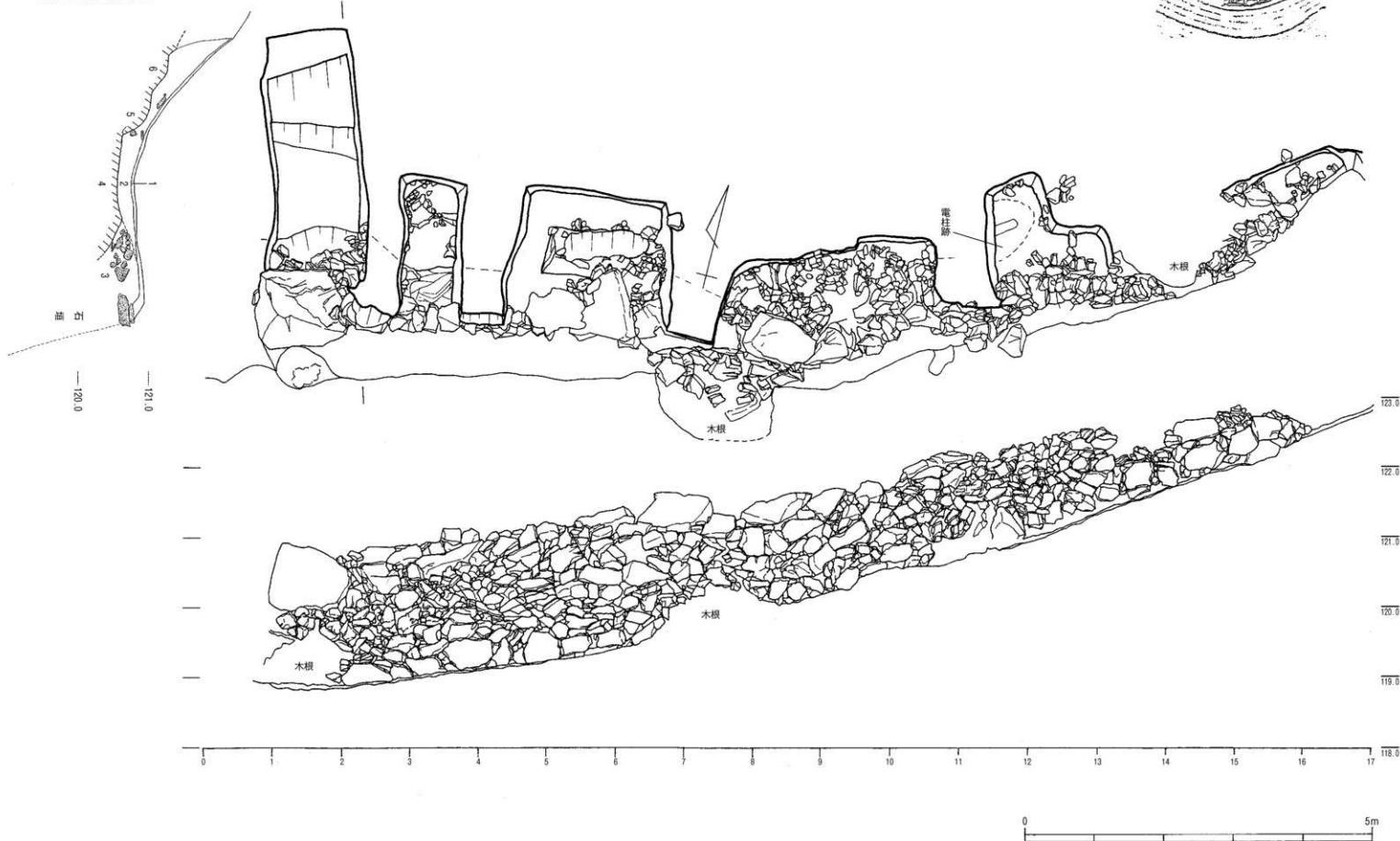


第16図 6区上トレンチ実測図



第17図 石垣1実測図

- 1 暗灰褐色土（小礫多く含む）
- 2 角礫、小石混じり暗灰褐色土
- 3 角礫混じり暗灰褐色土（石が多い）
- 4 角礫、大石暗灰褐色土混じり浅黄色土
- 5 岩盤
- 6 崩落土（岩と浅黄色土）



第18図 石垣2 実測図

### 第3節 遺物 (第19図・1~7)

遺物は石疊上面の蘿葉土や崩落土から近現代の遺物が多く見つかっている。およそ昭和40年代頃まで道として機能しており、家も途中にあることから生活品(椀・擂鉢など)まで出土する。また露出していた石の間にプラスチックも見られ、近現代まで修築されていた可能性がある。石疊面より下の層から遺物は出土していない。

(第19図・1, 2) は肥前系磁器である。(1) はいわゆる広東形椀で3区下の左側崩落土から側溝下にかけて出土したものである。今回の出土遺物で最も古いと見られる。口径11.1cm・器高6.7cm・底径5.9cmである。口径に対して底径が大きく、口径:底径が1:0.53となる。器高が高く体部が直線的になる。

内外面に淡青色の絵が付けられている。外面には福束3、内面に沈線、見込みにサギのような鳥が描かれている。

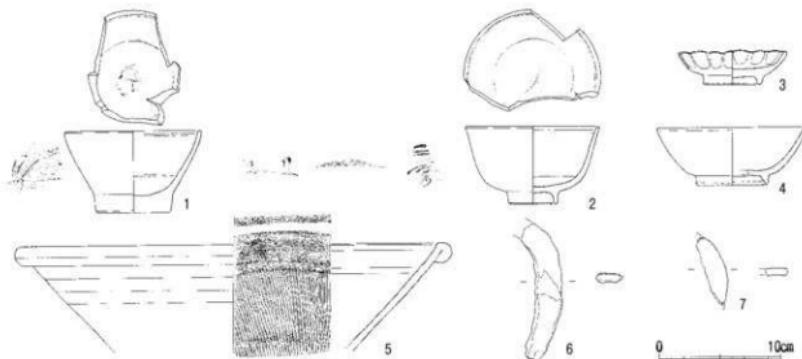
(2) は2区の石疊上から出土したもので、口径10.8cm・器高6.4cm・底径3.8cmである。内外面に文様が描かれる。内面見込の意匠は不明だが、外面は風景を描いたものと見られる。

(3・4) は国産磁器である。(3) は2区の蘿葉土から出土したもので、口径9cm・器高2.7cm・底径4.6cmの青磁菊皿である。型成形と見られる。光沢のある淡緑から濃緑色の釉がかかり、高台疊付は赤茶色に発色する。(4) は1区の石疊上から右側溝で出土した椀で口径12.2cm・器高4.7cm・底径5.6cmである。内外面に緑色釉が厚くかかり、高台疊付の釉を削っている。内面見込みには3点目跡が残り、復元で4足付の焼台を使ったと見られる。

(5) は2区の蘿葉土から出土した石見焼の摺鉢で、復元口径は34.1cmである。内外面に褐色の来待釉がかかり、内面の摺目は上端をナデ消すが、完全に消えていない。口縁端部は折り返して丸く造っている。

(6・7) は鉄製品で馬の蹄鉄の可能性がある。(6) は石垣1と石垣2の間の道で表探したもので、長さ11cm以上・幅2cmである。(7) は4区から見つかったもので、3辺が欠けており、外側の丸みが一部残っている。(6) と同様の形と見られる。

実測図は掲載していないが、他に明治以降の型紙摺りの肥前系磁器(皿・小杯など)、石見焼(徳利・捏鉢など)、素焼の土人形、高さ3.2cmの石人形(歩兵?)、2.3×3cmの銅金具などが出土した。



第19図 出土遺物実測図

## 第4章 総 括

出土遺物で最も古いものは、(第19図・1)の肥前系陶器(いわゆる広東形椀)で、肥前陶磁の時期区分ではV期(1780~1860年)にあたり(大橋1989・九州近世陶磁学会2002・大橋2004)。およそ江戸時代後期頃にあたり。(第19図・2)は肥前系磁器の端反り形椀に近く1850年代頃と見られる。図化していないが明治以降の型紙摺り製品もある。(第19図・5)の石見焼鉢も、摺目上端をナデ消していることから明治時代末から昭和初期頃と見られる(浜田市教育委員会2005・2006)。江戸時代後期以降、現代までの遺物が見られ、おおまかに石疊道の機能していた時期がわかる。

遺物から見ると唐谷道の時期は才ヶ峰石疊道(文化年間・浜田市下府町)、笠松峠の石疊道(文化8年・浜田市金城町)とはほぼ同時期で、18世紀後半から19世紀前半に石見・安芸地域の石疊がつくられたといいう考え(島根県邑智郡瑞穂町教育委員会1993・中越ほか1998)と合致する。なお、他県では、古い例で1680年(延宝8年)の箱根旧街道、1736年(元文元年)の大津・京都間の日岡峠の石敷きなどがあるが、その後にあたりる文化文政期の敷設が多いとされている(中越1998)。

一方で『石見誌』、『那賀郡誌』(第2章第2節参照)には明治5年の浜田地震で損壊した唐谷坂について「大に修繕し石を敷き」「道路中央所々に石を敷き」といった記述が見られる。およそ江戸時代後期頃から明治時代初めにかけて現状のような石疊道に整備されたと考えられる。

なお、石疊の下では部分的に地山上で2~5cm大の小石を敷いた面が幅0.9m程残っていた。石疊の基礎を安定させる小石とは異なり、側溝も上の石疊縁石と平面で重なり、幅約1.4mの道とみられる。石疊道に改修される前は側溝をもつ幅0.9~1.4mの小石が敷かれた道があった可能性がある。浜田市西村町の近世山陰道(荒磯谷地区)の調査では側溝をもつ幅1.9mの砂利敷きの路面が確認されている(島根県埋蔵文化財調査センター2008)。規模は小さいがこれに近い状況であったと見られる。

今回調査した下の石疊は、上の石疊と比較すると同

じ唐谷坂道の中で立地と造り方に差が見られる。以下、周辺地域の石疊道も随時引用して比較するが、全長の不明確さ、部分的な傾斜度のばらつきが多く、現段階では他の道の長さ・幅・勾配などの数値はあくまで参考程度のものである(第2表)。

### ・縁石の造り方

唐谷坂の石疊は平面で見ると基本的に縁石と敷石を区別し、縁石を先に決めて間を敷石で埋めている(A)。縁石は長辺を側縁にする場所と短辺を合わせる場所が両方見られる。才ヶ峰の石疊は縁石と敷石の大きさに区別はないが、縁は直線を指向する(B)。同じ道で地点によって両方の造り方がある道(山陰道・野坂峠)、混在する道もあり時期差を示す可能性は低い。現地で入手できる石の大きさや作業方針(人数・工法など)が関係しているとみられる。なお、三坂峠石疊は(B)で、大型石を進行方向に対して直角方向に敷くこと、石の短辺(小口)を側縁に揃えて並べるのは地点の異なる石疊でも共通する(中越1998)。

### ・石疊面の段

上の石疊は石段状に造るのに対して、今回調査した石疊は基本的に石段がなく面である。一部を石段状に造る石疊道は弥山道石疊、梨ノ木坂石疊道、笠松峠石疊道などがある。石段状に造るのは斜面の勾配が関連していると見られる。弥山道石疊の勾配は11%と低いが、笠松峠石疊道(25%)、梨ノ木坂石疊道(25%)、唐谷坂道(34%)ときついものが多い。弥山道石疊と笠松峠石疊道は江戸時代後期(19世紀初頭~前半)頃に造られており、石段状に造る方法は石疊道が普及する当初からあったと見られる。

### ・排水溝の有無

発掘調査を行った下の石疊には横方向(斜め)の排水溝が3ヶ所以上見られるのに対して、上の石疊には見られない。向原石疊、弥山道石疊など勾配が緩いものが多い傾向にあるが、きつい梨ノ木坂石疊道にも見られる。

道の両脇にある側溝(縦方向の排水溝)は、基本的に傾斜面に石を敷けば、水は石の横を流れるため表面観察で掘りこんだ溝の有無は判断しにくい。三坂峠石疊のように石疊脇で溝が確認されたものもある。

なお、通常の道でも側溝と斜めの溝が造られていることが、近世山陰道（浜田市西村町）の発掘調査で明らかにされている（島根県埋蔵文化財調査センター2008）。調査前に溝がほぼ埋没していたところもあり、表面観察の有無の比較は限界がある。

#### ・石疊道の補修

今回調査した石疊は3区上側で道幅を狭めた可能性がある。一部敷石列を残しながら、幅2.0mから1.3mほどに縮小している。1区・2区・4区でも石を敷き直して部分的に補修している。

上の石疊は石疊面の左の谷側が石垣になっている。さらに拡幅により土の道（馬道？）が造られた（桑原2000・古谷建設環境研究室1999など）とされている。

地形を見ると石疊面が左側の谷へ流出しないように石垣を築いたように見える。なお、土の道といっても実際は一部段状に石が置かれた土と石混じりの状態である。石垣は石疊の左縁石の途中から付け足して縦長の△形状の面を作ったように見える。平面形から見ると石疊下側を中心で拡幅したように見える。しかし、現状では石疊を敷設する以前の旧地形が判らないため、石と土が混じった部分が拡幅とは断言しにくい。

他の石疊道では三板峠（1992年調査）や弥山道のように基本的に幅を広げるものが多い。

#### ・道幅の違い

石疊の道幅を1間1.8mとして大まかに間へ換算するとは次のようなになる。山陰道の野坂峠石疊（幅3~42m・1.7~2.3間）、浜田広島街道（参勤交代道）の佐野・赤谷・三板峠石疊（幅2.1~3.3m・1.2~1.8間）、浜田三次街道の才ヶ崎石疊（幅1.9~2.0m・1.1間）、浜田波佐道の唐谷坂石疊（幅1.3~3.8m・0.7~2.1間）と差が見られる。唐谷坂道は下の石疊が0.7~1.1間、上の石疊が0.9~2.1間になり、併せて見ると道幅のばらつきが最も大きい。

近世西国街道（山陽道）は芸藩通志によると2間半（約4.5m）と定められているが、発掘結果からは道幅が2.1~5.1mとなっている（財団法人 広島県教育事業団2003）。一方、同調査において日向一里塚に挟まれた道幅は4.5mと2間半に近く、道を造る上で基準を遵守する場所と地形に合わせて道を造った場所があること

を示している。

この点を差し引いても、当時における藩・地域住民の重視（利用）度と維持管理の関わり、地形上の制約が、道幅の広さと計測値のばらつきに反映している可能性がある。石見の主な石疊道の道幅を比較すると、おおまかに山陰道＝浜田広島街道（参勤交代道）>浜田三次街道＝浜田波佐道（唐谷坂道）となる。

ただし、近世の主要街道は明治以降に拡幅されている。明治5年に浜田と芸州の往還道の道幅は6尺（1間・約1.8m）から9尺（1間半・約2.7m）に修繕するよう定められている（俎町1996）。実寸はこの数値とは合わないため、現状の道の観察から当初の姿を知ることは難しい。

今回の調査結果から、以下の点が唐谷坂道の特徴として挙げられる。

- ・山陰道や参勤交代道などの主要街道ではないが、しっかりした石疊を造る生活道である。
- ・石疊の幅や造りが場所によって異なる。石疊が途中から岩盤の刻目に変わっており、普段通行する地元の人々により維持・改修されていたと考えられる。
- ・昔からの道は廃れたり、工事などで景観が変わったものが多いが、今回調査した道は埋没していたため保存状況がよかった。
- ・地域の道を発掘調査で具体的に明らかにすることができた。

## 参考文献

- 旭町1996『旭町誌』中巻続  
天津直1925『石見誌』  
井上厚史2001「I. 近代化産業としての『唐谷坂石畳』」「唐谷坂保存会 第4回ウォーキング資料」  
井上寛司2001『中世の港町・浜田』浜田市教育委員会  
江戸遺跡研究会[編]2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房  
大橋康二1989『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』ニュー・サイエンス社  
大橋康二2004『シリーズ「遺跡を学ぶ」005 世界をリードした唐島窯・肥前窯』新泉社  
大庭俊次2008『島根県大田市温泉津町梨ノ木坂遺跡について』  
『島根考古だより』第93号 島根考古学会  
金城町2002『第1章 昔の交通 二 石見安芸道』『金城町誌』第5巻  
唐谷坂保存会2003『石央地域石疊道の調査成果報告書』  
川原和人1970『石西の須恵器』  
九州近世陶磁学会2002『九州陶磁の編年』  
桑原彰2000『謎の唐谷坂道をさぐる』『亀山』第27号 浜田市文化財愛護会  
財團法人 広島県教育事業団2003『近世山陽道路・日向一里塚・石立碳窯跡』  
柳原博英2007『浜田市唐谷坂道の発掘調査』『島根考古だより』第92号 島根考古学会  
島根県邑智郡瑞穂町教育委員会1993『石州街道発掘調査報告書』  
島根県邑智郡教育委員会2001『銀山街道「やなしお道」』  
島根県教育委員会1997『島根県中近世城館分布調査報告書 第1集>石見の城館跡』  
島根県教育委員会1997『歴史の道調査報告書 山陰道Ⅲ』島根県歴史の道調査報告書第五集  
島根県教育委員会1999『歴史の道調査報告書』浜田広島街道・浜田三次往還』島根県歴史の道調査報告書第九集  
島根県理文化財調査センター2007『梨ノ木坂遺跡(近世石疊の街道)』発掘調査現地説明会資料  
島根県埋蔵文化財調査センター2008『山陰道(近世)原・荒磯谷地区現地説明会資料』  
街中建設弘済会2004『中国地方 地域づくりと土木のあゆみ くらしを支えた叡智』街中建設弘済会四十周年記念誌  
樹林舎2006『定本 島根県の歴史街道』  
樹林舎2006『島根県歴史街道地図』  
津和野町教育委員会2007『山陰道発掘調査説明会資料』  
津和野町教育委員会2008『山陰道(野坂越・徳城越)』  
浜田高校歴史部1983『歴像復刊第7号 特集石見の山城について(その2)』  
中井将胤2008『山陰道(野坂越)の発掘調査』『島根考古だより』第95号 島根考古学会  
那賀郡教育会1970『那賀郡史』  
中越利夫・下垣豪・敦賀啓一郎1998『石州街道遺跡(三坂峠石疊)』の発掘調査』『道の考古学的研究 平成8・9年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書』  
中越利夫1998『西の石疊・東の石疊』『道の考古学的研究 平成8・9年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書』

## 書』

- 浜田市1973『浜田市誌』上巻  
浜田市教育委員会1977『浜田の文化財』  
浜田市教育委員会1992『鰐塚新右衛門』『ふるさとを築いた人々 -浜田藩追憶の碑人物伝-』  
浜田市教育委員会2005『平野窯跡(昭和9~45年頃の石見焼窯跡)』  
浜田市教育委員会2006『室田窯跡(明治~戦後頃の石見焼窯跡)』  
浜田市教育委員会2007『唐谷坂道発掘調査現地説明会資料』  
浜田市役所1950『濱田』  
松村建1988『中世後期の村落と土塁』『山陰史談』23山陰歴史研究会  
広島県教育委員会2006『弥山道(大型院道)石登発掘調査報告書』  
広島県佐伯郡大野町教育委員会1993『西国街道向原石登発掘調査報告書』  
古谷建設環境研究室1998『明治九年 河内新路橋略傳記 河内道路工事』  
古谷建設環境研究室1999『中世の往還道唐谷坂を探る』  
平凡社1995『三子山城跡』『日本歴史地名体系第33巻 島根県の地名』

## その他街道発掘調査参考文献

- 出雲市教育委員会2002『天神道跡第12次発掘調査』  
鹿島町教育委員会2002『奥才古墳群第8支群』  
島根県教育委員会1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』  
島根県教育委員会1997『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群』  
宍道町教育委員会1998『山陰道遺跡 [宍道・佐々布下-萩田] 発掘調査報告』『宍道町歴史叢書2』

第2表 主な石疊道と街道

| 名 称   | 施主(石疊・管ノ材)  | 終点(施主)                                    | 終点(施主)         | 街道名            | 所在地     | 長さ<br>(m)                 | 幅<br>(m) | 比高差<br>(m) | 支配<br>(%)    | 積石亡<br>石袋<br>袋石 | 積石水溝            | 築造時期・層類                        | 備 考  |
|---|---|---|----------------|----------------|---------|---------------------------|----------|------------|--------------|-----------------|-----------------|--------------------------------|--|
| 唐谷坂道(下石疊・管ノ材)<br>E.132' 52"~74'<br>E.132' 66'~55' 35" | N34° 52' 50"~45'<br>E.132' 76'~56' 29"                | 高田西通                                      | 高田西通           | 高田西通内町         | 150     | 1.3~2.0                   | 22.2     | 15         | A ×          | O ○             | 19世紀前半-瓦<br>田舎面 | 上約28cmは幅約1.5m<br>の石疊下に小石面      |  |
| 唐谷坂道(上石疊)<br>E.132' 07'~15' 07"                       | N34° 52' 50"~95'<br>E.132' 70'~18' 95"                | 高田西通                                      | 高田西通           | 高田西通内町         | 120     | 1.63~2.4<br>(0.79~1.86m?) | 40.7     | 34         | A ○          | O ×             | 浜田藩面            | 終点不明確                          |  |
| 浜田市内 宮松軒石疊道<br>主 佐野(丸へ)2重石疊道<br>主 石疊道                 | N34° 46'~17" 12'<br>E.132' 46'~63'                    | N34° 46'~09" 50'<br>E.132' 50'~10' 23"    | 石見中通り<br>往還    | 高田由金町          | 1200    | 1.2~2.0                   | 300      | 25         | A+B ○        | O ×?            | 津和野面            | 断続的に残き全く不明<br>様。一部つづら折<br>点不明確 |  |
| 浜田市内 宮松軒石疊道<br>主 石疊道                                  | N34° 53'~16" 35'<br>E.132' 59'~58' 59"                | N34° 53' 15" 06'<br>E.132' 59'~10' 11"    | 高田山軒通          | 高田山軒通          | 70      | 2.5~2.9                   | 20       | 29         | A? ×         | O? ×            | 津和野面            | 断続的に残き始點・終<br>点不明確             |  |
| 浜田市内 宮松軒石疊道<br>主 石疊道                                  | N34° 50'~55" 06'<br>E.132' 19'~38' 71"                | N34° 50' 51" 03'<br>E.132' 19'~38' 57"    | 高田山軒通          | 高田山軒通          | 320     | 2.5~3.0                   | 52       | 16         | B ×?         | O ○?            | 津和野面            | 文化年間(19世<br>紀前半-浜田<br>通面)      |  |
| オカ村石疊道  | E.132' 06'~32' 87"                                    | E.132' 06'~34' 09"                        | 高田二重通          | 高田二重通          | 165     | 1.9~2.0                   | 20       | 12         | B ×          | O ×             | 津和野面            | 文化年間(19世<br>紀前半-浜田<br>通面)      |  |
| 三重軒石疊(19世紀後半調査)                                       |   |   | 高田山軒通          | 色智賀色舟町         | 22      | 2.1<br>(0.9~2.0m)         | 4.7      | 21         | B ×          | O ×             | 津和野面            | 全長不明確                          |  |
| 三重軒石疊(19世紀後半調査)                                       | 北緯34° 49' 05" 東経132° 25' 34"                          | 高田山軒通                                     | 色智賀色舟町         | 7              | 3.3     | 1.3                       | 19       | B ×        | X ×          | X ×             | 津和野面            | 文化年間(19世<br>紀前半-浜田<br>通面)      |  |
| 主 な 石 疊 道<br>主 な 石 疊 道<br>主 な 石 疊 道<br>主 な 石 疊 道      | 山陰道(野坂村) 北側<br>山陰道(野坂村) 南側<br>櫛木坂道跡<br>他の山道石疊<br>向原石疊 |   | 山陰道            | 高足郡津和野町        | 180     | 3                         | 17       | 9          | A ×          | O ×             | 津和野面            | 全長1.5km<br>石疊上に165枚            |  |
|   |   | 山陰道                                       | 山陰道            | 高足郡津和野町        | 375     | 3~4.2                     | 65.1     | 17         | B ×          | O ○             | 津和野面            | 全長1.5km<br>石疊上に145枚            |  |
|   |   | 山陰道                                       | 山陰道            | 大田市温泉津町        | 179.2   | 1.7~2.3                   | 45       | 25         | A+B ○        | O ○             | 銀山面             |                                |  |
|   |   | 山陰道                                       | 山陰道            | 広島県廿日市市<br>大野町 | 65      | 1.5~2.5                   | 7        | 11         | A+ 積石<br>長方形 | O ○             | 広島藩面            | 19世紀前半-広<br>島藩面                |  |
| 近世山陽道・日向一里塚<br>主 街                                    | 北緯34° 26' 00" 東経132° 38' 00"                          | 山陽道                                       | 広島県東庄島町<br>西森町 | 162            | 2.1~5.1 | 21                        | 13       | —          | —            | ○ ○ ○ ○         | 浜田藩面            | 文化18(1812)                     |  |
| 要 場   | 北緯35° 05' 20" 東経132° 32' 13"                          | 山陽道                                       | 色智賀郡阿蘇町        | 140            | 0.9~3.6 | 1                         | 1        | —          | —            | ○ ○ ○ ○         | 浜田藩面            | 正保4(1647)開<br>発後? 濵田面          |  |
| 山陰道(尾崎6)<br>山陰道(尾崎6)                                  | N32° 49'~33' 58'<br>E.131' 59'~27' 72"                | N34° 49'~20' 76"<br>E.131' 59'~31' 93"    | 山陰道            | 高田由西町          | 200     | 2.0                       | 10       | 5          | —            | ○ ○ ○ ○         | 浜田藩面            | 通駁に石田                          |  |
| 山陰道(荒磯谷地区2)(X)  | N34° 50'~50' 43'<br>E.131' 59'~47' 76"                | N34° 49'~55' 08"<br>E.131' 59'~59' 45~45' | 山陰道            | 高田市西村町         | 90      | 1.8                       | 1        | 1          | —            | ○ ○ ×           | 浜田藩面            | 砂利・粘土面                         |  |
| 積石と散石 A 緑石と散石を区別するもの(大きさ・形状) B あまり差が見られないもの           |   |   |                |                |         |                           |          |            |              |                 |                 |                                | ※各数据は文献・実測による地図により算出したが、基準が不統一なため参考程度の数値である。 |



1区調査前



1区石疊始点



1区排水溝



1区拡張部



1区拡張部 石組



1～2区石疊



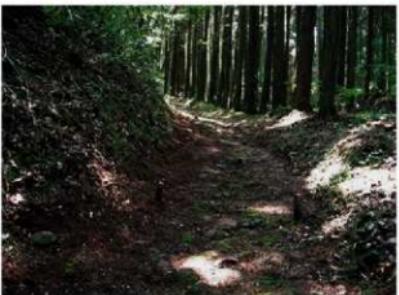
2区調査前



2区石疊



2区石疊下面



3区調査前



3区下石疊



3区下排水溝



3区下石疊下



3区下石疊 左側排水溝



3区下石疊 右側排水溝



3区中石疊下



3区中石疊下



3区中石疊下の小石面



3区上石疊



3区上土層



3区上石疊と小石面



3区上小石面



4区調査前



4区下石疊



4区石畳下



4区上石畠



4区土層



4区拡張部



5区調査前



5区階段状の刻目



5区土層



5区階段状の刻目（横木が入る）



6区調査前



6区



6区拡張部



6区上トレンチ



石垣1



石垣1側面



石垣1壁面



石垣2



石垣 2 側面



石垣 2 山側拡張部



作業状況



現地説明会



出土遺物（実測図掲載）



出土遺物（実測図非掲載）



唐谷坂道遠景（国道186号線より・中央の谷）



鯉塚新右衛門の碑（1865年建立）・6区上

## 報告書抄録

| ふりがな             | からたにざかどう  |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
|------------------|---|----------------|--------|-------------------|--------------------|-----------------------|---------------------------|---|
| 書名               | 唐谷坂道（江戸時代末～明治時代頃の石疊道）   |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| 副書名              | 浜田川総合開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| 卷次               |   |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| シリーズ名            |   |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| シリーズ番号           |   |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| 編著者名             | 柳原 博英   |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| 編集機関             | 島根県浜田市教育委員会   |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| 所在地              | 〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 TEL 0855-22-2612 (代)  |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| 発行年月日            | 2008年 8月  |                |        |                   |                    |                       |                           |   |
| ふりがな<br>所有遺跡名    | ふりがな<br>所在地   | コード            |        | 北緯<br>° ′ ″       | 東経<br>° ′ ″        | 調査期間                  | 調査面積<br>m <sup>2</sup>    | 調査原因                                    |
|                  |   | 市町村            | 遺跡番号   |                   |                    |                       |                           |   |
| からたにざかどう<br>唐谷坂道 | しまねけんはまだ<br>しこうちちょう<br>島根県浜田市<br>河内町  | 32202          | L 233  | 34°<br>52'<br>40" | 132°<br>07'<br>04" | 20070604<br>～20071102 | 503.42m <sup>2</sup>      | 浜田川総合開発<br>事業（第二浜田<br>ダム建設）に伴<br>う本発掘調査 |
| 所収遺跡名            | 種別  | 主な時代           | 主な遺構   | 主な遺物              |                    |                       | 特記事項                      |   |
| 唐谷坂道             | 街道  | 江戸後期～<br>明治初期頃 | 石疊道・石垣 | 肥前系磁器・石見焼         |                    |                       | 近世末頃～明治<br>初期に造られた<br>石疊道 |   |
| 要約               | 唐谷坂道は、浜田と金城・広島を結ぶ街道（浜田波佐道・浜田一河内・唐谷坂道・大杉峠・水上谷一七条一波佐一傍示峠一広島）の一部である。道自体は絵図の検討などから中世末～近世初頭頃まで遡る可能性がある。調査の結果、埋没していた石疊道が確認され、修築を行ながら維持されていたことが判った。石疊を覆っていた崩落土下から肥前系磁器（広東形椀・19世紀前半頃）が出土し、江戸時代末～明治時代初期頃に現状のような石疊道に整備されたと考えられる。石疊は約97m続き、途中から岩盤に約40mの範囲で断続的に横幅50cm・30cm間隔で階段状の刻目をいれる。刻目の中に木が残るものがあり、滑り止めに横木を入れていたと考えられる。 |                |        |                   |                    |                       |                           |   |

**唐 谷 坂 道**  
**(江戸時代末～明治時代頃の石疊道)**  
**浜田川総合開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書**

発行 島根県浜田市教育委員会 2008年8月

島根県浜田市殿町1番地

印刷 柏村印刷株式会社

附属CD内容

- ・本文(PDF形式)
  - ・調査・遺物写真(JPEG形式)
  - ・レーザー計測による画像(TIF形式・ZIP形式圧縮)
  - ・シミュレーションデータの動画(AVI形式・ZIP形式圧縮)
- Windows XPでの動作を確認しています。

収録されているデータの著作権は浜田市教育委員会に帰属します。

附属CDの本文は、冊子部分と同じです。冊子とCDを別個に利用で  
きます。

